

日露戰役史料

第九卷

北京天津電報

自明治三十七年
二月至五月

早稻田大學

リ印
2107
9



The image shows a ledger page with a grid of 12 columns and 10 rows. The grid is defined by blue lines. The first column is the narrowest, followed by 10 columns of equal width, and a final narrow column on the right. The paper is aged and yellowed.





明治三十七年二月分
北京天津電報集

支那戦備手帳

二月一日 北京發

支那の戦備準備は暗々裏に其歩を進め開平炭坑の塊炭及び粘炭併せて二萬噸の買入契約既に旅順口の海軍所用商人クレークソン商會との間に締結され既に明日より其積出を秦皇島に初むる若し南方同炭坑炭三萬噸の買入契約目下進行中にして多分三四日以内はその積出を見るに至るべし尚ほ又その外にも牛莊及びこの商店貯蔵の日本炭二萬噸もクレークソン商會より買入相談中なり

曠日彌久は露國を利し我邦に取りては不利益なりとの聲当地に於けり未美人中に喧し

天津度

袁世凱氏は練兵大臣に任じを辭したる旨願ひ出でたり頑固派の妨害あり其改革意の如くなるおるを以てなり

北京度

日米兩公使より頼りに滿洲開放を迫りつゝ

袁氏の練兵大臣
辭職

滿洲開放問題

この領事駐劄と同時に税関設置其他諸般準備の必要あり清國政府は是等の準備に就ては奉天將軍増祺に訓諭せし所あり準備の整頓を待つて開放を宣布せし手筈なりし今日の情況に之は實際是等の準備着手に困難の事情あることは兩國政府に於ては諒とせし所あり條約の明文に依り表面上其開放をば迫りつゝある所の日露問題蒸着後なりては開放の事實を見ふこと能はざるべしと云ふ

二月二日 北京度

袁世凱氏の練兵大臣職に遂に許可を得て慶親王と共に奮勇練兵の事に当り日べりとして上諭出ひたり

二月三日 北京

別項遊難者（哈爾濱の日本人總代）の直談に
ハルビンに在るハ爾濱に架設せる鉄道保護の局
めと稱して新に四門の大砲を同市の入口に据
けりたり又浦塔斯港の背面防禦工事既に完
成し居りハ爾濱に於ける毛皮類と薪炭類と
ハ各皆軍需品として各國産産に買上りてハ代

價は未嘗有の暴騰なり

鉄道技師として使用せし居たり波蘭土人は
ソゴルハ突然解雇せしめたり其後任を命せしめ
たるはセイヤシ工（未詳）なり

馬賊の横行は近來一層の活動を加へ白晝露人の
の商店に闖入して數十台の車軸に貨物を満載
し行くも力あり畏れなきは教門の野砲を引き來
りて不意に露國の兵營を襲撃し軍需品及び武
器等を掠奪し去りしなり此に對する露人の
處分法緩慢なり

十萬兩の紙幣を鑄造し得る丈の原料紙は鑄造
器械と共に一組四千兩にして市場到了所は販賣

満蒙の我居る民

さし居りし露國ハ之を禁止せざるのみならず
廢造紙幣の流行ハ國威度揚の一助なりて却つ
て之が利用の方法を講じつゝあるもウ、如く
吉林ニシテ鑄造せる銀貨ハ一元が四十錢、安直
ト下流せしと露は留紙幣を以て盛に之を買収し
本國に發送し居り云々

右商賣より当地へ遊難し來れり居留民總代の
直話に同地ニハ目下千餘人の同胞あり時局の
切迫ニ伴ひ何れも大不安の念を懷き居り先
程訣布警署署長に向つて萬一の際我等の生命
に危害なき様保護を與へうと心きや否やと乳

サシに談署長は奉天迄護送せしと云みりし
甚だ曖昧なる挨拶ありしを居留民一同到底
露國の保護ニ依頼し難きを悟りて同地を引揚
ぐるしの多く其他ハ五十兩宛の醵金を爲りて
天幕食品等の準備を整へ萬一の際ニハ道を通
蒙古に取りて山海關若しくは張家口方面へ遊
難をべし事ニ決定し居り又齊々哈爾濱に三石
海拉爾に二百名の同胞あり如何に危難を避け
得べきや疑同なり

天津岩

津鎮鐵道と樞
公使

樞使公使の来津は津鎮鐵道北部、美國にて未
だ工事の着手せざるに因り之を樞使に譲ら
む、運動の爲りなり

遼東に於ける
圍遼兵

義和と出度したる七十名、夜圍遼兵は馬玉昆
の兵を北京の北部より朝陽義和の方面に出で
たりとの説あり、復察の爲め北行せしむ
こと未だ錦州に至らず

二月四日 (天津員)

遼東錦州に
入る

遼兵八十錦州に入り、宿舎を占領し、駐屯し居る

東清鐵道と日本人

東清鐵道は邦人の来津を禁止す

長門丸の警戒

昨夜奉皇嶋を抜錨する者あり、長門丸の危険
と気遣ひて出港を見合せたり

同上後報

樞使報：長門丸の昨夕警戒あり、出帆
す

樞使公使と津鎮
鐵道

樞使公使は昨日、海京より津鎮鐵道運動に無効
なりとあり

吾國軍艦の出る

吾國軍艦の振出を在りし昨日吾國海軍へ
の出港せりとの報あり

吾國の石炭買入

吾國は開平礦務局より石炭三萬噸を買入北奉
皇島に乙白國汽船、棧中なり

(北京名)

中央政府の諮詢に對して各省總督巡撫等之意
見は多く開戦說に一致せり。陳夔龍恩壽等教
名、非戰論なり

各省督撫の時局

二月五日 (天津度)

満洲の露兵は全く戦時武装を爲し頻に兵員を
移動し各地とも戦時部隊に改め居り先月初旬
千々に来りしコサツク六千南下し居りて東清
鉄道は軍用の外運轉せむるに満洲内地の日
本人は引上げること出来難き模様なり

満洲露軍の戦備

二月六日 (北京名)

吾國公使は新任齊々哈爾副統頭程德善の艱骨
屈し難く且つ民心を得る事甚だ厚きを忌み其

不逞な吾國の臣

米國公使と滿州開
市準備

前職の卑賤と副統領に當る漢人を任命せし先
例なきを理由として撤任を外務部に迫りしに
慶親王は兼謀の意ありしに伍廷芳其不可を力
奏せる結果清国官吏の任命に就ては他国の容
喩を許し難き旨回答せし米國公使の程德善排
任に付ては今日之を明言し難き事情あるを恨
と云

米國公使は一面外務部に向て滿州開放の實施
を督促せりと同時に開放準備の件に付て總稅
務司と内識を疑ひ存し清國政府に於て在真
実せざる時は事情の如何に拘らる先が領事

と派遣して餘儀なく準備に着手せしむんと云
に挨拶あり

袁世凱の練兵大臣
辞任事情

袁世凱の練兵大臣辞任を奏請せる原因は練兵
費の財源に付きて自己の財政意見を採用せし
ルがごとし今一は御史中に袁の兵權過大を諷奏
せしむのありしに在りたり

二月五日 (北平)

過般報通の滿韓子より屬部に入りし米國兵中
八十騎は錦州を來らば蒙古地方に赴きしとの

米國陸軍の活動

遼國の進軍準備

とにして具飾は馬玉良の兵の朝陽附近に在りし
のを偵察の目的なり
旅順より運送船二艘約二千の兵を乗せ鴨
緑江に向ひ又旅順口から一方向より遼陽を
経て鳳凰城に向ひ可き兵士の遼國人の言に依
るに一萬と云ひ之が處より遼陽に在り馬車及び
旅館の全体を徵發して準備に備へ海城に兵
三千新に來り城外に宿營せりとの報知あり

二月六日 (天津發)

遼陽にあり遼國守備隊長は遼陽より鳳凰城に

嚴正中主の支配

至る間の道路を大至急修繕せしむる旨清國地方
官吏に嚴命し且つ強制し居り
袁世凱氏は若し開戦の際に臨むに嚴正中主を
守るべき旨その部下に嚴命し國際公法の規定
を此等に配附せり

(北京發)

遼國公使レフサー氏と一筆書託官ロイデーノ
ウスキー氏とは從來其間不和ありしが激烈な
り両着後談書記官ハ告別をせむるに帰國せり

遼國公使館内の不和

袁世凱の北平の事

(天津友)
第五師隊の夜間兵約五十名錦州に到着し明日
北京に向ふ者尚ほ小黒山一七八十名の兵に到
着せし由

(北平友)

去月より発刊せし仙掌新聞の事
産刊以来危激の言を放ちて清國の革命の時極
に在りとして革命党を煽動し皇太后を亡くす
呼び袁世凱を刺客(?)と唱へ清國外務部
ハ容赦する能はざるより譴責片を仙國公使に

仙掌新聞の暴言

エハイエに依頼せし同公使は之を承諾し
直に其主筆たるカモランを召喚し詰問した
るに同人は抗辯の末暴言を放ちたるより公使
は憲兵を呼んで退出を命じたるに騷擾を起し公使
は同新聞の發行禁止を命じたるにカモラン
は弱弱版に其顛末を印刷して配布せし

中立嚴守の準備

中立を守り居るキヨケイガイは當地に残り馬
玉炭と袁總督の常備軍司令官オウエイカイと
は部下を率ひ山海関外と朝陽方面に出陣する
の機定し準備中なるに湖南洋式兵約二千は
時直より出京を命ぜらる可く各總督巡撫に

北京の人文界

對一萬一の準備を急ぐ勿れとの命令發せらる
山東丸の芝罘より引返しをること並に本日午
後小村外務大臣とロンドン公使との会見の報
傳より戦争の開始目前に迫りしと信する人多し

牛莊領事の引揚

瀨川牛莊領事は引揚の命を受けたり

仙國記者の退席令

昨日電報したる仙國新聞記者ども一ランは退
席の命令を受けたり

二月七日 (北京)

熱河都統より近來義兵の出没をりて居民
怖々たりとの報告

張總督の帰任

張之洞氏は本日帰任の途に就き天津にて袁世
凱氏と会見を可し

(天津)

瀨川牛莊領事は居留氏と共に引揚す明後日當
地に到着する者なり

先牛莊領事の引揚

義兵熱河の出没

張之洞氏の来津

張之洞氏、歸任の途次本日当地に立寄り、西三日滞在の若かり

二月八日 (北京發)

本日午後内田公使は外務部に至り、日露談判趣
：破裂、昨日露國に向し具是後通牒を發し左
る旨通告せり

内田公使の開戦通告

戦時の大北電報

昨日大北電報会社より公使館、通信員等に向
け日本及び韓國宛の電報ハ爾今其到着ニ関し
る責任を負はざり旨通告せり右の理由ハ日本

露兵の来京

昨夜露國公使館に牛莊より露國兵五十名来着
せり

滿州露兵の情報

滿州地方より歸京し左に來國公使館附武官下
ラスター大尉の談に依れば滿州に於ける露兵
は更に活動の模様を見む唯大張順ニあり一第
九、第十、第十一、第十二の東部西比利亞相
擊隊は遼陽に來り近日中に鳳凰城及び鴨綠江
に派遣さるべき模様なりと云ふ

清国の中三歳等

(天津支)

清国ハ目下山海周附近に於て人夫を募集し又牛豚の類を買合し居り存小と袁世凱氏ハ戦事上の目的に用ひしものハ決して供給せざるらざる昔地方官に命じたり

清国に在る炭買入

清国ハ又開平石炭四萬噸の買入を行へり

滿州地方の本邦居留民

哈爾濱地方の日本居留民ハ浦塩斯德に向て兵事引揚けたる模様なり其他は漸次當地に向て引揚ぐる者なり

旅順に連る本邦居留民

水野芝罘領事は昨夜旅順大連に赴けり同地の日本居留民を引連り芝罘に歸るべし

(天津支)

新民地にはコサツク兵三十人來り清国ハ國外鉄道の一部を獲得せん目的に其準備は從事しつゝ切了可なり

清兵が奉天遼陽等にて微度一鳳凰城安東縣方面へ送りたる車輜ハ一千餘に達せり

清国と營輸鐵道

清国に在る鐵道

支那遼西方面に清國兵の派遣を恐る間諜を各地に派し、嘉償せしめつゝあり

遼西一帶清國人の日本人に對する感情頗る佳し

二月九日 (北京發)

日露の開戦と同時に西宮再び西安に播遷さるべしとの風説は其緣由なきに非ず皇太后は嘗て陝西監禁使范增祥に向つて其意を宣示されし事あり范增祥は却て西遷の事無き説き内

廷に於ては内々車輛調度等の準備を命じ居たり程なりと慶親王袁世凱等は却て其不可を陳奏して皇太后の意志を翻し得たりなり

此程入京陛見せし江西正考官張人勳は江南一帶兩宮西遷の風説高き由を奏聞せしに皇太后は直に軍機大臣を招見し西遷のとなす事と宣布して人心の動搖を鎮定せしむ旨勅諭あり

(天津發)

遼西一帶の清國官吏及び馬賊等も皆夜兵と敵

開平鑛務局の賣炭
北池

視一居、我邦人の受宣一

開平鑛務局は昨日に至り、俄國より石炭三百
萬噸買入の申込を拒絶し、是迄既、賣込を
したる、四萬餘噸、過すべし

馬玉崑の兵二十營は山海関及び附近一帯の地
を派遣せし、守備の任に當る事、決せり

天津義兵の引揚

五日午後義兵二十五名奉天に引歸せり

張之洞氏の一辭

張之洞氏、即里に向ひ出度せり

奉天島の義人

袁世凱は在り、袁人は總て山海関に向ひ引揚り
たると出度せり

鳳凰城の中主

(天津号)
袁總督は文武各官、鳳凰城中主、責任及び權
利ある旨を告諭せり

東三省の鑛山採掘

奉天將軍より、申報に、アレキ、レ、丁、總督は突然
東三省の鑛山の清國に於て從來既、採掘せり
七八の外、俄國と商議の上、あらむらん、今後
自由、開掘するを許さむ、旨照會し來り、と

しりし由

覆國が今迄に開平局より買入ル石炭二十
五萬噸なり

遼陽在留の邦人約八十名、既、同地を引揚が
て山海関に向へり

新民屯に入り、兵六十名、一日間滞在の上
東北に向ひ立ち去り、彼等は土民より鉅款百兩
を徴せり

開平局の量産量
数

在遼陽邦人の引揚

新民屯の兵

遼西の覆國

營口大石橋蓋平海城間の覆國馬賊の居り、破
壞せし、張順と覆京間との覆報不通となり

二月十日 (北京五)

清國の中立地域、一善隣國、不利ならざる範
圍となり、局外中立の宣布と同時に、之を而交戦
國、通商をへし、辛苦となり、居り

昨九日午前九時より、夜に至り、遼旅順方面、當
り砲声の轟々たるを聞き、たりの報先、下奉皇
嶋より来り、一、次、下、皇、(電) 報、依り、激烈なる

清國の中立地域

遼西の大捷と北京

海戦の末、我軍の勝利たることを判然とし、尚且同
時に仁川に於ける捷報を接する所あり、人気が大
に昂る。日本帝國萬歳の声到る處に響く。
内田公使は居留民有志者や乞ふに應じ、明日日露
間の外交願未と講議せらるる事なり。

二月十一日

(天津發)

奉天及び鉄嶺の居留民は東清鉄道に乗車を拒
絶せしめ、引揚が難く瀨川牛莊領事は復國の民
政廳に懇合せんとせしむ。民政長官は英國領事

を逼りて遂に開戦せし今日公務の交際を應
じむと言ひ領事ハ之を盾として引揚が延引し居り
領事館員と正金銀行支店員とに今日着津した
り其他の多数は山海關に留まり、便船を待ちて
歸國せんとす。

東清鉄道の沿路に三所毎に兵を配置し鉄道
電源を保護し居り、尚且馬賊の暴勢を免れ
是にハ最軍も頗る苦心し居る模様なり。

(北京發)

旅順仁川の捷報を傳聞せし請國官民ハ我武力

内田公使と外交
末

中立綱領の配布

馬賊と夜間電線

の強執なるに頗る感動し外人間も同情、北方
のしめ方、夜間公使館、其捷報取消、全力を
盡し大狼狽の模様なり

内田公使、今日居留民の祝宴席上、乙外交顧
末を發表せり

清国政府、中立綱領数万部を各軍隊に配布せ
り

(天津冬)

遼陽に結党したる馬賊の一部六群團、鉄道電
信線の破壊を目的となせり、夜兵の電線保護は

六丁毎に一名をたし、一處三丁毎に三名を以て
警戒し居り、其間隙に幸して各所に出没し、
目的を達し、つ、ち、夜間ハ之を秘密にして
平気を装ひ居り、軍器上の不便を感し居る

當地より、西比利亞鉄道郵便の輸送は中止と
なり

當地の美米國居留民、我を戦捷を歡呼せり

夜間不同平局より買入れ、石炭、我ら艦隊

西比利亞鉄道郵
便停止

戦捷と天津外國
居留民

敵の石炭輸送停止

輸送と停止あり

二月十二日 (天津誌)

昨日午後より旅順艦隊總出にて秦皇島沖にて
大激戦ありとの報あり取調中なり
金州知れりとの附近に我軍運送船集まり上陸を
待ち居りとの説あり
満洲鉄道の破壊せしむるに箇所は七箇所にて
七十餘哩に及びりとの事

(北京誌)

一種必要の憂慮

各国公使中に昨日露開戦の結果清国臣民の無
謀ニル露公使館に向つて暴動を企つる事あり
んを慮り露の人心の鎮撫に注意せしむるに告外
務部に注意せしむるあり

祝賀訪問者と困難

戦勝祝賀として昨今我公使館を来訪せしむる
英米清等各國人等毎日數十名あり昨夜公使館
の公報によれば牛莊より天津に引揚ゆたるとも
の三十名秦皇島に百名山海関に百名の日本人
避難者あり而して瀨川領事、哈爾濱方面より
引揚ゆ来り同胞姓名を待受け人不足の橋牛莊
に滞在し居り

イルクフワクワク、到着せる獨逸商人の談話に、
此の該地の学生数千名が露國政府の存せざるに
断じて戦闘に從事するの義務ありと公言し、動
きれば反逆の態度に出入るとするの傾向ありて
驕慢言人方なく兵士等は四ヶ月間の清給支松
運送の辱め不平あり、なり云々

仁川沖に於ける我の海軍勝利の公報及び旅順
の捷報傳はるや順天時報、號外を出し清國人
は到る處日本萬歳を唱へ、に露國公使館ハ之
を打消さんと一昨日ハ館員總出、て日本ハ勝

利ハ捷報あり日本ハ敗北せしと言觸ら、
英米人ハ心筋を憂慮せし、昨日ハイタル電報によ
りアレキシ、一、總督の報告、乙、真相判り露國
公使館員ハ色を失ひ英米人ハ善色面を濼小た
り

昨日僅き小たる内田公使の招待會に、昨夜ハ
公使館の夜會に、此の旅順口の公報なきも各種
の情報日本の勝利ならざるは無く萬歳の聲堂
宇を飾る也

清國人ハ我の勝利を聞き左なきを、露國ハ暴
横を憎み居ることとて無智の徒此機を乘り露
國公使館に反抗するや、知れおるを以て、順天

時報に非常の動議を以て 配布し居る 號外を暫
時見合は氏とと、なす

袁世凱氏ハ錦州道台ニ對し馬玉崑ハ兵近日朝
陽ニ向ふ者有ルハ糧食を供給せよとの命を下
せり

今明日中清國政府ハ嚴正中立の上諭を發せ可
し

二月十三日(北京發)

日露兩國開戦を慮し居り、清國朝廷ハ軫念し
西國とも友邦なれば當國ハ局外中立の例ニ照
し諸事を辦理するハ各省ハ將軍督撫ハ宜しく
此意を體し部下の軍民ニ曉諭して奉公を守り
大局を誤らざるを勉むべし猶ほ又日露の開戦
ハ當國と釁隙を開くに非ざる事内外地方は正
ニ安堵をばしと本日諭旨を下し中立を守り
況し又各省の將軍督撫は開港場の外國人と其
財産を保護し可し人若し妖言を發し乱をなせ
ば迅速に捕獲し可し京師ハ地面ハ重大な事ハ
歩軍統領衙門工巡局順天府土城御史ハ嚴密に
巡察し各公使館教會堂ハ殊更ニ注意保護し可

いと力上諭を申し出たり
提督衛門工巡局は那桐兼職となり康親王へ行
前大臣專任となり

各団公使の協議の上各本国政府に向日各団軍
の駐屯せる山海国内に於て日露兩國の戦争を
なすべしと標日露の政府へ交渉せしむる旨を電
報し其決議をサト一美国公使は内田公使に
シエハイニ公使はレワサル夜団公使に齎
らして通知せしむ昨夜に至り清国全體中立を
布告したるに決議の必要を見おぼしむるに至り

當国政府は各団に向ひ當国全體は中立をせし
滿洲は日露の交戦地たるに内地の臣民は抗し
或は日本に從ふことありしを以て當政府は
中立を破りに非ざり旨承認せしむると通告せ
り

昨冬より張家口に宮廷用の多量の駱駝を買入
れ又深更に及び宮中より荷馬車を出たり西
宮西安へ播遷の謠言盛なり不昨夜に至り巡
幸のこと決して無し内外臣民安堵せしむる上
諭出たり

清國鉄道の中支

内外鉄道會社ハ中支の意味を曲解し一日露の
軍人及び軍用品搭載を禁じたりハ司令官より
目下懸合中なり

牛莊領事引揚ぐ

瀨川領事ハ昨日營口より引揚ぐ 哈爾濱カレゲエ
リン方面の避難者共々来るの苦

(天津支)

瀨川牛莊領事着津したり 奉天鉄嶺の居留民ハ
無事引揚ぐたり

滿洲居留民の引揚

吉林：居留十五名の消息は今に至り迄達せき

其他滿洲内地の居留民ハ凡て無事引揚ぐたり

露兵の牛莊守備

今月十日露兵一千人大砲八門を引きて牛莊に
来り嚴重に守備し居たり

山海関に居り、八十名も昨日牛莊に引上りたり

二月十四日

(北支支)

遼河以西の清國
防備

當國政府ハ又各國政府に對し遼河以西露國境
一期撤兵地域は自國兵を以て之に駐屯せしめ
其中立を破るべしと堅守をべき旨通告せ

寇人 寇隊 寇本 邦人
唐侍

(天津支)

夕夕、スタル、哈爾濱、クンダリーリンの秋
居留民約三百名ハ引揚の途中ニシ金錢ハ勿論
荷物悉皆之寇兵の奪り、奪り小食物も亦介
ニ與へおりのみならず或ハ蹴り又ハ撲りたりと
其處待名状えべしうぞ旦つ半莊ニ来りし妨
道、旅順、龍運、小石子、其後何等の消息ニ
ト接せ也
在吉林及ハハハ爾濱ニ残留せし者ハ此内ニ加ハ
り居、模様なり

馬賊 賊梁

日寇 人 幸 剛

寇人 寇隊 寇本 邦人

十日の夜再び馬賊の窟乃蓋平大石橋岡、營口
大石橋岡の寇隊を破壊し小石子
海軍、馬賊八百餘起し寇兵五十死傷をとり
報告

昨夜山海關にて寇人と邦人と力同、幸剛起ら
んとし、我軍隊の注意、依り大事、到ら
か

昨夜溝帮子營口同の靖國軍隊寇兵の窟乃、切
断せし、其目的は当地と國內との通信と

杜絶する爲なり。海軍子なり。一技師を派出せり。山海關に目下多数の下等旅客と醜業婦と群集なり。

開平局の運炭船開平號ハ昨日奉皇帽を出発して上海に至り途中同島沖にて長船の爲り此撃せしむ聊可損傷を受けたり。當地の美国人ハ大ニ激昂し英公使より袁公使に談判中又開平局備船が口口デンスル亦同日砲撃を受けたり。

昨午後瀨川領事署津管口ニ二軒の秋旅館残

留して内地より引揚人と世話を事となし。リ哈爾濱より旅順大連に向ひ邦人旅順にて大虐待を受け居り。又滿洲より引揚人は大部分山海關に止まり。當地に來れり。今日の追數十名、過ぎに當地の北京タイマス週報に袁國に買収せしむる模様なり。

國內鉄道は中立宣言後秋軍餉糧食等の運搬と拒みしり。仙波司令官ハ袁總督に交渉し駐屯軍ハ公使館居留民を保護せしむるに軍事行動に非ざる旨と以て依然乘車し得る事とせり。

滿洲引揚日本兵の所

二月十五日 (天津名)

奉天以北の地より延着して達して左に我の同胞
二百名、大石橋に於て捕縛す。小旅順に抑角
身とす。少く
同行中にて僅に四十五名の虎口と道小居たり
し。少く昨日山海関に到着せり
秋營の領事引揚後本邦在留民は米國領事、保
護を依頼し、右哈爾濱の避難者ハ滿洲の奥
より南下し來りし。其の世話せん。居り大都會の
邦人の捕縛に引揚しに拘らる。居り、居り一載

使者なり秋領事ハ米國領事、其実状搜索と今
後の保護を依頼し、満洲各地に、最早日本
人あり也

(北平名)

昨日哈爾濱遼陽方面より引揚來り本邦人二百
餘名の中百七十名大石橋にて捕縛し、小旅順に押
送せし。三十名は幸しくして捕縛を免る。小旅

(天津名)

前夜夜船、砲撃せし。小旅順に震平號は旅順を出で
本邦避難者と乗せし上海に向ふ。途中数度砲
撃を受け支那人三名即死せり。池の一艇ハ

引揚邦人捕縛

南航砲撃後報

にビデンスにて負傷、なうりー中

冷雨廣りり南下せり避難者の一行奉天、着て
子や兵、毆打掠奪も行ひ監獄、拘禁、一叠
夜飾りも止め置けり三百留の賄賂を行ひて
漸く無蓋貨車、乗せり小男子、大石橋、女子
ハ營口ニ送る小たり女子の内、ハ男子の惨虐
せりり、と見ゆに忍びを共、大石橋、行らん
と謂ひ、ハハのありたる、ハハ共、旅順、送
る小たりり、旅順、ハハ強姦有りり
暴虐公然行けり小たり營口の米國領事、目下反
困当局者と交渉を重んじ、ち、當方、ハハ世

界の毒論、新へり事、努力居り、当地の同
胞救済会ハ山海關の避難者慰問の爲り毛布、食
糧品等を携へ委員を派遣せり

(北平電)

八旗中学堂の武官教習として聘せられたる熊本
縣人後備歩兵少尉堀部直人氏、其自身軍籍、ち
りながら従軍の願望を達し難きと憂ひ一昨日
午後二時校内に、自己の室内にて自殺を計り
昨日午後二時迄、絶命を本日陸軍墓地にて火
葬せり、後、張監学大臣を始め同校教職員等
ハ義烈の行を、ハハ賛賞し居りり

(天津支)

昨今西口營口山海関崗、邦人の交通一人もな
く吉林哈爾濱、連う水、避難民男三百餘名、是
果に送、水と婦女、未だ分らぬ山海関の
避難民、同平局の汽船、近日仁川へ送らる
、若

二月十六日

(北京支)

一時動搖の兆ありたる當地の人心、我海軍勝
報到着後漸次鎮靜、帰、

而宮は特、西安巡幸の意なき事を既、宣布せ
し、り、水たるも更、同一の理由を勅諭せ、

裁振貝子、前大臣に榮兼氏に軍械大臣本官
、任せらる

肅親王の突然歩軍統領並、工巡局事務官理を
免せられたる緣由、該親王が兼ての持論たる
歩軍統領衙門と全廢、其經費を轉用して警察
制度を整頓せん事を奏上さる、該衙門長
役等、自己衣食の道と失はんことを怖れ守舊
派と慶親王派とを連結して、肅邸を排斥し
去らざる、慶親王派、那桐氏が其後任、補せ

う不たすに徴をすし此向の消息を知りた難う
うさすべしといふべしや

(天津支)

昨日コサワリ兵三十六名新民屯に來り偵察を
たり兵營震報局等と嚴査し滿韓子に走し新
民屯に巡邏兵を増加せり

滿州各地露人の逃走正しきもの多し

遼西に於ける露國軍大作戦計畫は付テントラ
ス中将總指揮官とありミシニコ少將參謀長と

コサワリ兵新民屯に
來り

露人の逃走

露の大作戦計畫

なり海城に高等軍團を設けたり

保定の常備軍二十營、明日山海関に向ふ若北
京より一千餘名の鉄道保護兵を増加せり

山海関増兵

開平鑛務局汽船
砲撃事件

開平鑛務局汽船旅順を度し上海に至り途上
砲撃あり砲撃さるなり之はつり島地英人同り
大激怒ハ無論のことなり其他外人皆露國の
無法なるに采れ返りたり

開平鑛務局の之に對し大々的損害賠償を提起
せんといふ目下大々的意氣込み居たり

二月十七日（天津）

奉天の福園駐在兵、増祺將軍に向ひ清國兵を
一て東清鉄道の各線を保護せしめんことを命
令したるに同將軍、清兵不足と稱し之を拒絶
せし

奉天の砲兵は凡そ百名を残り他は皆何れへも
出發し残兵のみを鐵道を守備し居り
奉天府西門附近の旅箱は必要の場合砲兵隊
の用に供せざる為め立退きと命せらるるなり

解先可^ららむ^る
奉節

奉天の砲兵

山海関に在る日清

山海関に在る秋避難者凡そ二百七十名、明後
日開平局の汽船にて本國へ護送せらるるべし

更西國兵の去來

英國兵八十名香港より補充の爲り到着せり仙
園兵は明後日順仁川に向ふなり

山海関方面の清
兵

馬玉崑統率の清兵二十五營本日午後山海関に
到着の恙

在滿州邦人の取扱

一昨日奉天、遼陽、大石橋、營口等にて百餘
名の秋の邦人捕人り小一も米園領事の文海に
て無事山海関に向へり

邦人追捕せしむ
と云

邦人の間諜捕縛の爲め兵士、田庄名、来り更
ニ西方に向ふなり

二月十八日 (北京支)

清國の嚴正中主を防護する爲め袁世凱氏
の常備軍ハ山海關方面に向付出發せり尙ほ馬
玉農氏ハ亦来り二十一日其部下を率りて出發
せり

北京守備隊長より 哈爾濱旅隊長に轉任せしむ

哈爾濱旅隊長暗殺
と云

清國の中主防護

ウスイスキ大佐は赴任の途次營口、奉天間
にて何者より暗殺せしむる旨昨日或筋一末
電ありたり

二月十九日 (天津支)

去る十五日の夜營口に在りし邦人の爲に夜
間兵士二名兵五十を率りて乱入し男子三名を
縛り一名を負傷せしむ米國領事ハ此報に接し
予や直に現場に馳付て警察署長の出張を求
め其暴行を詰責したる上縛を解き米國公使に文
函に損害賠償を請求したり 福岡領事ハ翌日其

米國領事
事の保護

奉天艦の擄艇

山海関：在る本邦人

頗る不安心と見ゆ

池の邦人二名を合せ都令八名を停事場より係
護を加へて送り居り女子二旅費さへも共へ懇
篤なる取扱の下：一行、因色恙なく山海関に
到着せしを得たり

獨逸二等巡洋艦一隻奉天艦に到着せり

山海関：在る邦人の開平線にて長崎へ送り
たるに決す

營口駐在在露國領事の夫人、随員二名と共に引
揚り去りし

馬賊の暴行時

吉林將軍の拒絶

一種の詳報

海城：蜂起せる馬賊、六群圍遼にて内地附近
の震涼鉄道と破壊せり

露國の更々吉林將軍、向に鉄道保護兵の派遣
と文海せし可是亦拒絶せしなり

(北東局)

外務省より取柄を出したる夕イマス通信員
日本兵及び日本軍艦の行動：同定る通信員
國軍：徑軍の居り夕イマス社より特報せし
たにグリナーの電報にて慶地より轉電せ

一に過むを談記事にモリソノ氏少シル同知
在り處ニあらざ

二月二十日 (北条氏)

在米清國商人の名義を以て外務部ニ送(一)皇
上の親政(二)日本と聯盟して露國と開戦する
こと(三)軍事費ハ在米清國商人等より支給
せしむること皇太后ニ代奏あり度旨電票あり
たり併し当局者ハ第一條の入奏と憚り未だ代
奏せし模様見にぞ

在米清國商人電票

新年の宮中演劇

新年の恒例に依り宮中ニ演劇の催しありを
皇太后の出行なく王公大臣ニも陪觀許可の
旨沙汰なりし時節極去りある心となり

牛莊陸兵の増

牛莊ニては我陸兵今ニ七上陸をべしと噂高
く従来駐屯の露兵ハ恐怖を抱き士氣の沮喪甚
たしく焉ニ新ニ旅順より二千の露兵を増
派せり

各國公使の参賀

各國公使今朝参賀乾請宮ニ於て函宮ニ拜謁参
賀の辭を述べたり

二月十九日 (天津島)

營口：冬裁りの夜艇ホーパルは一萬四の懸賞
こゝ引卸の計畫を爲し居少

白河の氷解けたる大沽河口は目下猶ほ氷の厚
さ二寸位あり兩三日中は航路同通在べし

營口の引揚の後北で暴虐に遇ひ邦人の護
撫水に十一日の夜營口にて我軍艇と陸兵進撃
の報傳へり水陸團領事夫人に米團領事館へ
難しと救護を求め俄國人に大活動を爲したる

二月二十日

(北京島)

二月二十二日：大石橋より歩兵五百騎兵二百
五十名十三日：歩兵千二百其他騎兵も来り
て大警戒を加へたり俄兵が營口を占領したる
との報傳あり此時なり
目下俄兵の懸賞し日本兵を捜索し日本誌を
解する支那人及び日本人と親交を爲す支那人を捕
縛せしむるに多しと云ふ

魏光燾氏の「國際法の規定に準り中立国の守る
べき義務と管内の民衆に告示す

増祺將軍より 外務部へ達したる電報に依りて
昨日を以てアレキシーフ總督ハ病氣と稱し奉
天府に赴きしも實際ハ用向江同地の露國軍事
工匠局を通し清國兵ハ六十露里以外に在りて
鉄道を保護せんとの事を請求するに由り
其真意ハ不明なりし馬賊ハ鉄道破壊を恐るし
ハ餘り清國官兵の或ハ馬賊と合同せんことを
氣遣ハ清國兵ハ敬遠策を採るに外ならず可
きも右の請求に從ハば同地の如きは將軍衙門
の衛兵も直に立退らざる可からざるハ誠よく
之と拒絶せりと云ふ

旅順口より 其清國大臣への情報に依りて海軍
の敗戦以來露人の上下士氣沮喪しアレキシー
フ總督ハ到底同地を固守する能はざらむと思ひ
にハ重要書類器具等を奉天へ運ばし運搬しつゝ
此のハ趣がハ前報と対照しアレキシーフ
總督ハ再び旅順口に帰來せざ奉天を以て一死
守の場所と走りて非をやらむの說あり

牛莊ハ露兵の増加したるを以て既電の通りなり
る同地ハ我陸兵上陸の導高よりハ露國以
外の各國人ハ民政廢り爾來禁止し居るに拘

米國日本人之救

何レ自國之旗を軒頭ニ翻シ露國人ニ非ざり
と表彰シ露國人ハ外國人の許ニ避難シ又露人の
將校に取急キ河化ニ其妻子と避難セシむる準
備を爲シ民政長官兼露國領事なるケロクセ氏
は妻子と天津ニ送ラタリ同地の恐慌非常なり

二月二十一日 (北京也)

旅順口の北方商店員二名引揚の際軍事探偵と
誤認セラル同地監獄ニ呻吟セラルを故に出立ん
爲り秋内田公使は米國公使コソカハ氏之を
依頼セラル同公使より牛莊領事ニラハ氏ニ訓

令を下シ同領事は民政長官ケロクセと通トシ
旅順口總督府ニ交渉中ナルに不日その釋放を
見ユ可シ

(天津也)

夜半は昨日切斷セラル奉天新民屯間の電
線は明日修復スル筈なり
巡警兵五十名銃通保護の爲り新民屯ニ向ヘリ

營口駐在米國領事は橋満外ニ居残ルニ幾合
の本邦人が引揚の途中旅順ニ押送セラルハ
とと急遽ハ館員一名と大石橋ニ派遣して見張

電線修復ト鉄道
保護

感謝と米國領
事の配慮

リを考さしめ居たり

二月二十二日 (北島費)

清廷は目下滞在中なるジエックス博士を財政顧問に備形して各省財政の調査と戸部財務の整理を考さしむべしと云ふ内議あり果して実行さすべしや否やは未定なり

昨日午後内田公使は慶親王を訪問し上海港内は碇泊せる露國砲艦マンガエーを局外中立規定に準據して宣しく速に出港せしむべき

ジエックス博士備
聘の議

マンガエー砲艦

上旨談したるに慶親王の之に答へて清國中立を宣言してより以來或はレツサー公使に對し或は又胡惟德を経て露國政府に對し屬々交渉を重ねたるも今に至るまで要領を得ず到底この儘に放置せらるる事態なるは強硬更之に談判を試みる考なりと云へり

尤も或は露をへさ筋より開き込めし所は據れば清國の自國の海軍力弱故に強力をを用ひマンガエーを強を出港せしむること到底困難なるに露國政府と協議の上或は條件を以て依然上海に其繫泊を許さべし内心なりと云ふ

袁國ハリノ極基

二月二十三日 (北平夜)

昨夜(二十一日)午後四時發延着して當地に達した。駐袁公使胡惟德氏より電報、據ハロ袁國政府ハ清國政府ハ遼河以西の盛省第一都府ヲ袁國ハ其第一期撤兵期限ハ於て還附したる地團を以て中立地と爲るに反對ありと云ふ至急之に對して抗議せよ小んことを望むと云

上海駐艦處

上海の駐艦處合回數ニ就き内田公使の強硬な

る抗議に對し未田公使ハ其間ハ斡旋の勞を採りつ、少り多分武裝を解すことゝなると云

袁國紙幣不通用

留紙幣ハ最早牛莊方面ニ通用せよと迄ニ其信用ト失墜せり

二月二十二日 (天津夜)

保定常備軍の關外輸送ハ明日より開始せらるべし派遣地ハ山海關、永平、錦州等ニして馬玉崑ハ朝陽ト根據地ト爲る事なり

清國幣通入止む

清國の保護

了しきこと一、總督、清國人、對し滿洲鐵道を
保護せむき告示を爲したる、其文中、一、奉天
驛軌の際、清國人を保護したる、云々の語
あり也

馬玉崑朝陽の白

馬玉崑、通商より陸路朝陽に出發せり

遼東邦人と來せ
午、廣平張

満洲より、遼東邦人、今夜廣平張にて、皇皇島
と發し、長嶺、白の表

(北京發)

清國の海軍
艦制

清國政府、内田公使の申出、是を昨日南洋大
臣魏光燾氏に訓令を以て上海港内に、あり、清國
軍艦、即ち中立を無視するものなり、を以て速
に退却せむき旨を命じ、若し尚ほ命に應ぜ
ざれば、同艦の軍器を沒收し、其乘組員の上陸を
強制せむきと命ぜり

又清國政府は同時、レ、サ、公使に對し、右の
語を通告したる、同公使は本日、了し、了
總督、上申したる

新民報より、奉天府に、至り、同の清國要路に、兵
之と切斷し、環程將軍と清國政府との交通は、爲

兵の來源

クハトキント
アレキシーフ

ウ：杜塞さ小なり

クハトキント 將軍の極東へ派遣する事とな
りたるに 對し 某外交官の説を序して曰く 同將
軍東看の上ハアレキシーフ 總督の位置如何
至る心さや 是れ注意を要するべき問題なり 總督
の官職よりして云へば 固よりクハトキント 將
軍の上位に居るべきものなりと云ふもクハト
キント 將軍の官歴は 總督の指揮を受くべきもの
にあらずが 結局アレキシーフ 總督は 病と稱し 體
よく 辭職するに至ることなりん

頁外地方の事
句題

(天津竟)

夜國ハ清國の中立地域、固一清國、交渉と申
出たること既に其風説あり、本日固外地
方、向々出たる者あり、袁世凱氏の清兵は遠
く 樞樞督となり、固内永平府、駐屯せしむる
こと、クハトキント 全く右の風説の事實なり
一證據として 軍械處より 袁總督の許、其内訓
せしむるに 依りて なるべし

二月二十四日 (北軍兵)

袁世凱氏ハ此事につき 頗る 激昂し 連日 夜國
對し 抗議を述べ 旨に 申したる處ありん

清國の軟弱と再
田中使の最後

昨日午後内田公使は慶親王を訪問して袁國政
府の提議せる中立地域減縮（袁國不第一期撤
兵期限）於て還附したる地方を中立地域外と
存せんとせしものには飽くまで抗議を申さ
む可く萬一袁國の同意を得ずれば山海關以外に
兵を出さざるに於ては中立宣言の當時日本に
對して聲明せし辭に違ふものなり日本に於
て七十分の計畫ありと嚴詰しなり

蓋し清國外務部の軟弱なる袁國公使館員領事
等が極力袁國の失敗を掩飾せんが爲り海軍に於
ては敗戦を了るとも五十萬餘の陸兵にて日本軍

を全滅し得べしと傲言を伝布したる結果清國
當路者も恐懼病に罹り居る事なり

(天津電)

昨報北洋馬隊の北行を了るの傳へ千名其要合
點、永平府なりと云ふ

滿洲を引揚げたる本邦の陸軍は昨夜八時秦皇
島を出発せし海城に二名大石橋に二名常呂村
婦人の狭道を了るのやうに大石橋の二名は袁の
赤十字社看護婦たうん手續を爲す者

清國馬隊の北行

滿洲の狭道を了る
婦人

十八日益大石橋、て三十一二歳の邦人重保切
斬の嫌疑を以て殺兵の爲に後殺さしむるとい
説あり

満州：一日本誌：通たる朝鮮人の探多く
て園外鉄道に一日雨衣衣必也乗証み居少し其
一回の報告料は五銀なりといふ

(北平)

アシキシーフ海警の奉天、行きたる意面のみ
實、病氣深表の爲めと称す小ど其実鴨緑江方
面：対する防案計畫の實地を接合する必あり
りてありとの説あり

總督府移轉：対する一般の觀測は袁國の旅順
防禦の困難を覺し止むなく退嬰主義を取リ
そのなりんべ之の爲に殺兵の士氣一層沮喪
べと疑を容れ小むといふにあり

慶親王は内田公使の警告を容れ昨夜駐劄公使
胡惟德氏：對し中立地域に國兵を駐劄の抗議
は飽くまで拒絶をべしと(重)訓しあり

上海：在る袁國の艦マシエーと號し慶親王
就て清國政府の意見は清國の海軍力たるを以
て港外に追出せ給はせ故に武装を解ししめ兼

上海の戦艦

従前は清國に拘捕せんとせしむるに由りて日本
政府の方針に清國政府の意を免南薄弱なるに
付て此際同艦に對し充分嚴重にして之の有効
なる處置を施すにせらるべし到底端迄は注
意せしむるに在り

外務部は袁國公使に交渉し、マニラに在り
て一定の時間内に武装を解くべし、然らざ
れば退去せしむべし、若し肯んがらば兵力を以
て強制をせしむと上海通商台に電報せり、右に就き
南琛の外に揚文那軍艦一隻江陰より上海に到
着せしむるに、此同致に一兩日中に解決の豫定

袁世凱軍の
食糧を増強

なり

(天津発)

袁國は清地外國商店の手を経て麥粉九千袋を
買入、其内多少は旅順口へ向け送出し、右も
の、如く證據は確ならずとも畢竟軍隊の食
糧と爲るの目的に外ならず、是以て袁世凱氏
は鐵道局に注意し、復送せしむるに極力計ら
るべし

清國軍海軍

昨日出資したる袁世凱部下の兵は騎兵五百名
にして皆濼州にて下車し、永平府に向ひて進行

一 國外へハ出でば巷々中立區域に圍はるる我國
ハ抗議ニ就て北京政府の意志是よりおし不慮
のなき可し尙且今明兩日ニ歩兵三千隊是より
出發ス

本日常備軍ハ北上スルもの七八百名あり 管營
口附近に集合スルべしと云ふ

(北京員)

我國公使は清國政府ニ向つて必要の協定ニ
遼河以西をも交戦地域たらしむべき旨抗議
ス 其真意は清國政府に境上防備を以て大兵

を遼河の右岸ニ割駐スルときは勢ハ兵力を割
きて之ニ備へざるを得ざるハ不利益耳ハ中立
を遼河以西をも交戦地域とし支那兵を國外
ニ踏み出スることならしめ依て以後顧ハ憂
ハを緩くせんとなすに在り係定常備軍に國外
ニ於て一步を退き取平府を中懸となすハ
全く之の爲りなり一然るに我政府は無論
の抗議を以て不利益と認むべけれど清國政府
ニ對しては容易ニ我の抗議ニ同意スルこと能
はざるべし一境上防備を以て派出スルべき支那軍
隊の配置方々其中立地域決定如何ニより猶更
更を見ざるべし

樞東總督府移

清國の南境守備

旅順口の外人被服

二月二十五日

(北京書)

樞東總督府を女兩廣に移し下しキシ一フ以下
の總督府文武官の同地、轉割せしむる報通は
信憑を以て

貴州巡撫李經羲は貴州常備軍を一新し一萬
の兵丁を募集せしむること並に之を經費の困難を
出さず請し居れど可成可成可成可成可成可成可成
アレキシ一フ總督は旅順口に在る外國の非軍

人：退去せしむる

北朝秋軍艦二隻旅順口、於て撃沈せしむるの
説傳へし

先刻電報したる我軍艦二隻撃沈せしむるのと
の説は俄に傳へし流布せし謠言に似て全く虚
報なり

(天津書)

本日又常備軍歩兵八百名北行せし

二月二十六日 (北京)

日露の開戦後露國は公私一切暗號電報を廢
せしめざるより滿洲地方の情報は清廷にも明
白ならぬとぞヤレシ一ノ總督不奉天滞存
増祺將軍を限制して右種の布告文を出さしめ
車輛馬糧軍夫等の徵発に少くならざる 援助を無
へしめつゝ、あるは事實なく 同將軍は露人の深
知に堪へず病氣と唱へ引籠り勝ちにして一切の
公務は部員延悠として代辦せしむ居りしと云
り

魏夫焘の奏請：因り南陽常備軍統領張春發と
新疆に派して其軍務を廢弛せし罪を償はしむ
べしと上諭出づ

遼東中土回紇の文戦地域たりしと云ふ
二の理由は馬匹糧食等の徵發を容易ならしめ
んが爲めなりと奏せしむ

溝幫子附近太流山停車場に敵兵百名新民廳の
北東柵家鎮に二百の騎兵駐屯せしとの情報也
清國武官にて滿洲より歸來せしもの、談：滿

遼河以西と極東

州鉄道は四情里毎、三十のフサフクと延警の
者の烽火台を置き馬賊の鉄道破壊を備へ居れ
り
獨逸が遼河以西と中立地と看大ことに反対せ
し風説に付、但廷芳氏に余は對し獨逸公使は
過般同氏に對し會見の際贊成の意を表し去
十六日駐獨清國公使が獨逸皇帝に謁見の際七
十分中主と破らばる振防備を看丸べく獨逸に
助力せんと言はせしなりとの電報に徴し處
信なりと主張せり

内田公使の警告

内田公使は本日午後慶親王を訪問し、マンダ
エール號と中立地域問題に付、露國の反對を
飽くまで排斥せしと忠告する筈なり

(天津費)

白河全く解氷、外國汽船一隻本日入港す

二月二十七日

(北京電)

清政府の同、露國砲艦マンダエール號の
武装を解き同艦及び乗組員を戦争に從事せし
め、戦争終了まで清國に於て之を抑遏せし

白河の解氷

マンダエール號
と解く

日韓議定書と清

とに根約定す我國の窮島懷に入るの意に
深く追究せむに決す

内田公使は昨日午後慶親王を訪ひ新に締結せ
らるる日韓議定書に付て詳細なる説明を爲
し中立地域に關する我國の提議に關しては議
定する所ありき

上議院と商務部

台平義公使は同國資本家の計畫せる漢口上
海間の鉄道敷設に付て外務部と交渉を重ねつ
つて商務部は該資本家の一主張を奉公銀二
百萬兩の献納を承諾する時、直に奏請の手續

に及ぶべき事、内定し居る由

直隸守備兵

備定常備軍及び馬玉崑の部兵は大半境上防備
の任務を帯びて關内外に駐劄し居るに京畿
守備の必要あり湖北の後軍二千四百は既に北
上の途に上りし筈なり總兵袁辛酉は山東の涿
軍を率ゐるを北へさき旨訓覆を受け居り

二月二十八日(比参)

胡惟德氏よりこの覆報に據りて遼河以西を中立
と爲さんとせよの議に對しては外務省に
是見あり清國政府に於てアレキし一層知ると
直接談判を試みんことを望み居るなりと

中外中立問題

を以て省外務部はシフサー公使を経目下絶
東總督と交渉中なり

二月二十八日 (北平電)

清國政府は中立地域に就ては日本政府の意見
通り決定を共有了ことに同意しなり然るに俄
團は清國政府の回答如何に對せ亦遼河以西の
地を以て全然交戦地域と認定し居りしや、如
く該問題提出後逸早く新民地に三十名の義兵
を駐劄し更に退却の模様なり

左右中立問題

直隸總督袁世凱氏は戦時を國際關係に付き非
常に多懸念を抱き居りしや、如く逸て獨逸の
備外國人ニ對し戦年中遵守せべき條規七箇條
を添付せし契約書の記名調印を求り且つ國外
駐防の支那軍隊に一切外國武官の從軍を許
可せざることとに決定し居りし

日露戦争と支那
備外人

山海關方面の清兵

客臘二十九日以後境上防備として派遣せし馬
玉崑部兵の布置は朝陽一帶に歩隊兵七營建昌
一帶に歩騎四營平泉州一帶に歩兵二營砲兵一
營古北口に歩兵二營テフコに歩兵一營合計約
十九營に及り馬玉崑自身も昨日朝陽に向け出

陣中

二月二十九日 (天津宛)

營口：子夜、露團砲艇、戦闘準備を爲し、艇体と
黒色、塗替夜間、コサワリ兵三百人にて警備
し居りし

營口附近五哩の間：六千の夜兵あり、牛羊豚を
出来得し限り多く徴發し居りし

哈爾濱の市民は總て退去を命ぜられし

在營口の敵艇

營口附近の敵情

哈爾濱市民の退去

袁世凱の銃器買入

(北京宛)

直隸總督袁世凱氏に瑞記ツアイン商会より買
入れし約定を爲し居りし銃一萬五千挺の体
上海に現存の分と大砲六門と、既に受渡せし
りし、独逸商人等、此際日本より銃器買入の不
利益を吹聴し、尚多額の賣買契約を爲さんこと
を勉め、三井大義は袖手傍觀の姿なりし

明倫彙編
家範典
三月五日

北京天津電報集

大沽の解氷

清國中立履行

中立地域と袁世凱

三月一日 (天津度)

大沽海口は西三日全く解氷一昨日二隻の汽船初より入港せし

清國ニハ軍需品の著輸出を防ふん爲め兵員巡捕を諸所に急派して監視せし居りし

(北京電)

直隸總督袁世凱氏ハ時局ニ對シ當初より頗る強硬なる意見を抱き居たり而中立地域ニ関ス

日長國の提議を餘り、專横なりと憤り、長國と
衝突せしむ。危険を冒して、一旦確走せる。政策
を固執せし決心なりと聞く。

吉林將軍長順氏の薨去を追悼し生前の勲功、
よりして贈位叙勲の恩典と共に、入祀園子並に傳
を許す。奉養料一千兩を下賜せしむ。猶其
後任として、禮部侍郎銜溥錮氏吉林將軍署理と
命せらる。

三月二日

(北書後)

長國人の採掘し居る盛京省、吉林省、遼寧省の炭坑
夫は同盟罷工を起し一人の労働に従事せしむ
の事。蒸し暑い紙幣の下落に伴ひ、賃銀
の減少は甚因せしむ。と奉せらる。

倫貝子に明後四日當地を出発渡米の途に就くべ
し。

長國ハ清國ハ兵ニ備ふる爲メ田庄台より新民
廳ニ至る間ニ於テ各要路ニ騎兵及ハ騎歩兵を
配置し新民廳ニハ砲臺門及び二百メコッパ
兵あり南原鎮泰ハ爲メ講和子附近ニハ三三

のこさつク兵饒細一居ル
營口ニ一第十一聯隊既ニ去リテ 唯モ第十聯
隊二箇中隊とコサフク兵若干ヲ留ルルガニ
一 秋陸兵同方面ニ上陸ノ風説止ムト云フ
なり

(天津電)

袁世凱二萬鴨綠江を渡リ 韓境ニ入り去リ との報
或筋ニ違フ

滿洲一帯ノ地方ニ於テ袁世凱ル一ノ紙幣大暴
落ヲ来リ開戦前ニ比シルハ半額ノ價值トシ有

セズ

(北京電)

アレキニ一ノ總督は去月十六日附を以て東三
省一帯ノ清國官民ニ向ヒ在リ告諭を發シたり
一 日本は袁世凱とハ交渉中突然秋ハ水師を發遣
一 予リ勢ハ確視在ベラウカハハ袁世凱は利権保
護ハ為日本トシテ 袁清兩國ノ境域を侵犯セ
ウカス

二 袁清兩國ハ陸地ニ素々唇齒輔車ノ關係あり
敵我ノ國境を犯スハ協力對抗スルニ至当ト云
然ルニ清國政府は却テ局外中立ヲ希望スル本

太守は滿州駐在の清國各官に向ひ馬糧の買入
其他に付充分の助力を與へらば人事を望む
三東三省の居民は各其堵に安んずるを望む
至るやうに親好を以て之を遇はべし我軍は敢
て居民に掠奪を加へざるのみならず却て保護
せらばべし

四、東清鐵路は電線電柱は附近の居民を以て
協力保護せらるるを以て毀壞を企つるものあり時
ハ附近の居民を以て其責を任せしむべし
其我國は馬賊を剿滅して良民の保護を任むべ
し汝等は其報復を恐るゝなく匪賊の所在地を
告知し其巢窟を搦索せしむに便せしむるを以て暗に

匪賊を庇護せしむるものありしを以て之を
問ふべし

六、清國官民中若し我國を敵視せしむるものありん
ば我政府は毫も貸借せざる所なく誓て之を殲滅
せしめばべし

三月三日 (天津電)

新任韓國公使岡詠詰氏は昨日午後太清看今朝
当地を來り直々上京せし

奉天將軍は十五營の新軍を募集し東三省の要

駐清韓國公使の到着

滿州新軍の募集

地：分布走了若：乙其給金以東三者の收入より支出を以て兵器彈藥に北洋より送り小たす旨電奏せり

(天津宛)

夜兵三千更に營口：増番し清人は警戒を加へ商業は停止せり人心恟々たるを免れ夜兵の盛：馬車を徵発せり今日一輛の馬車も見當らぬ夜人の營口旅順等より難く當地：来るルの日：益々多く清人の遊蕩難者も日々二三百名と下りぬ

營口方面の敵情

三月四日 (北京宛)

新任韓國公使昨日来着也

(天津宛)

在營口夜清銀行支店に豫定者：引出を求め弗の代り：留て換算せし又は他所の支店に勘定を移さるべしと指示せり多分閉店せしむるべし之不慮の恐慌起るべき模様なり

夜國砲艇レガチは戦闘準備既：成りしと傳へらる

新任朝鮮公使

夜清銀行支店の閉店準備

營口方面

アレキシーフ總督は二十二日奉天に着き停車
場を本營とす。兵は毎日三千位づ
つ同地に到着しつゝあり

(北京文)

聖詔昂博覽會の正使たる貝勒溥倫殿下。本日
當地を出發し上海を經て日本に至り觀光の上
米國に赴く。善なり

牛莊より歸來したる某英國人の談。曰く目下
同地は日本兵上陸の噂止む難穩にして兵數も一

昨日打擾せし如く五百名に減せし。元來三年
間武斷的台鎮となり。税関其他の收入は、款は巨
額の利を占めたる。露國は到底同地の守り難きを
を覺知し之を中立地となし。以て日本兵の上陸
を拒き一方は、今後長く外國人の手を經て貨
物を購入せん。と奸策にて切り。各國領事及
商人を勧誘する。露國の用途若くは外に散て
之を應ずる。と無く一時も早く日本軍の來着
を望むとす。

瀨川領事以下營口領事館員は皆最近の便航
し歸朝の者なり

清國中立地城の警戒

提督馬玉崑の兵三營あり既に朝陽に着せり尚十二營の兵は目下瀋陽に輸送中なり元來朝陽の揚玉章の統率せる八營の兵駐屯せしとて今四の増兵に因り遼寧の兵備頗る鞏固を加之

アレキシーフ提督

アレキシーフ提督は奉天提督に親交あり交渉番員を以て或は同喝的、或は哀願的、種々の要求を提出せし居り其効を一概に提督に旅順にて負傷せし人の親に事案なり和

清人日本軍と説

東三省に於ける露兵の暴虐日々に甚しく掠奪強姦台畫を行はし清人の日本軍の早く来りて救済し事を渴望し居り

三月五日 (北信文)

遼東の事情

遼東より帰来せし某外國將校は余に語りて曰く露國の日々五千の支那人夫を使役して旅順口の背面防禦工事に従事し該防禦隊は清國より分捕砲を振付くを吝かからず大連湾と外ルニ一との間を布設せる水雷の敷

は三百六十箇、一乙其内三十二箇は流失す、馬賊の統領馮國麟、杜立山は二千の部下と新民府附近の山中に隠匿し城を見こ、敵軍と衝突計畫なりと

(天津矣)

旅順口より当地の霞清銀行に宛て至急送金せよとの電報来りたり、此際現金の輸送は到底不可能の事なりと、又牛莊に於ける同行支店は引揚の準備中なり

露兵は鳳凰城九連城附近一體に於て牽制牛馬

を徴発し農民を捉へて人夫と爲す等傍若無人の振舞、同地方の清國住民は皆日本兵の早く来りて援けんことを望み居たり

備貝子昨日来津本日、伊集院總領事仙波司令官等と招待し明日出発の安手続に上海に向ふ夫より日本に立寄り渡来の筈

千ヤイ十々イハス、至筆コウエニは英國總領事より安寧を妨害するの虞ありと、退清を命ぜらるるなり、諷新聞、確実な報道を傳へて誤らぬ深く日本人の正義正道を稱賛し、敵軍の暴

公使夫人の拜賀

唐無通を攻撃し居りしや、こゝ地日本人
満腔の同情を以て同氏の不幸を悲しむ

各園公使夫人は本日年賀のたより参内例、所
宮中へ於て御算を賜はるべし

(北京電)

ジエンクス博士を財務顧問に遷職せしむる
説を建議せしは前米園公使館積書官たりし道
台シントウなるものにして同人の之を爲し
所史の
彈劾を遺へり

ジエンクス博士係
昨の建議者

西藏問題と清廷

清国政府ハ西藏問題に關する英國の主張を容
れ極力我園を排斥せしむべし、美公使に向つて
暗に其説を傳へるものありしや、傳へしものあり

牛莊歸來後

牛莊に於ける官民は同地が早晚日本軍に占領
せらるるべきを豫想し、今より早くも引揚準備に
汲々たり

我園民政廳ハ紙幣の下流を憂ひ海關量司と呂
喚し清園商民等は何故我園紙幣を法定以下に
通用せしむんとせざるを想ふ、旅順の敗戦を以
て我園を輕侮せしむるなり、今後は必ず法
定價格に通用せしむるべき旨嚴達せしむる今や談

旅順口の軍需
欠乏

紙幣は如何に割引く一切市場は通用せむ
露國は牛莊の市民は一般に同情を日本に寄与
すを怒り戦者一露軍は不利に帰して同地を退
去せし不始事なりんは日報復た露の全市を
焼拂ふべしとの恫喝的風説を流布しつたり

三月六日 (天津發)

旅順口より当地露清銀行に突て又々至急送金
せしとの催は露報来少其来意は露歴今月中
に少なくとも二十萬留を送金せし小ハ大に困
難と感志と云ふにありて同銀行は尤も心配せ

在旅順支那人の
引揚

い如何せん開戦以來取付、過以資金おく漸
く僅に九萬留の紙幣を集めて店員を支那の人
夫の如く装束なり昨日山海關に向き審、送金
したる模様なり此事実互に先月末当地より麥
粉を送らんとせし事實は微く旅順口は軍用
金及び糧食の十分なる準備なきは最早掩ふ
可からざることを信せらる

我艦隊が旅順港口に自ら商船を沈し降夜國
は軍艦を雲沈せしと聲言したるは其實は不知
れ渡りたり同所にあり請國人は早晚旅順の
陥落をべきと豫想し同地を引揚せんとし二

三百名停車塔に至りしに、我兵之を抑止し漸く他の驛にて乗車避難せし由

(北舟身)

伊定常備軍の永平移禁に對し、我圍コロニコロ大佐は爾餘の外國將校等と共に、櫛州に至り支那兵下車の模様を自警して、豫想より規律の嚴正なるを一驚を喫したる由なり。不歸津後直に袁總督に會見し、其訓練良好なるを賞賛し、且つ斯る精銳の兵を有する以上、二三千の出兵に上境上防備に充分なるべし、更に通州の大部隊を朝陽に派駐せしむの必要なきに非ざるやと意味

袁總督の氣相

と、氣に誇りしに袁氏、哄笑一番足下、前日余に向つて貴國を教へ、月内、五十萬の大兵を滿洲の野に集めらるべきを告通せしむるに、日本も亦少くとも三十萬の精銳を遼東に進派し、心算小、日夜兩國の兵を合して八十萬以上なるに、我國を一黨内外の兵を出せに付て、余ハ其方なきとこそ感か小、其過多を知らぬと答へたるが、コロニコロ大佐、更ニ返へて心き認めなく、一と總督府を辭し去るを由

昨日公使夫人謁見、嚴肅に行けり、左に不或臺味より言へば冷淡、行けり、右に御宴の席

公使夫人謁見後同

ハ皇太后皇上皇后三陛下共出街せらるる
大公主美慈を代つて扈伴せらるる御
引見の際皇太后ハ例ニシテ萬遍なく優渥な
御詞を聴けさせらるる頗る打解けたる態度を
装けせらるる居在りし其時同日極りて短く僅
十合同ニ過ぎざりし由

(天津露)

西三日前旅順ニ於て義經の水兵三十名脱艦せ
し其停車場ニて捕けし直ニ執殺せし事なり

新民屯ニ在る敵兵ハ三百名許にシテ電報局ニ

占領し明日より技師を派遣し電報の檢閲を行
ふ事なり

三月七日 (北京度)

露國公使レフサハ外務部ニ通告して曰く
滿洲地方到る處ニ馬賊蜂起し或ハ電線の切断
を行ひ或ハ鉄道を破壊せんとして貴政府ハ宜し
く増祺將軍等ニ命じて速ニ之を鎮滅を行はし
むべし然らば貴國の中立宣言は遂ニ無効
ニ屬せべきなりと
嘗てハ馬賊を煽動し之を益する所なり又良

遼陽の現況

民を駆逐して遊：馬賊：捉むるべし止むを得ざ
る：至るべしめたる夜國ハ今：及びて彼等が苦
むむ所となり具結果清國の官兵を用ひて之
を強壓せしめんことを求む其處の好む既：驚
くべきものありに新へ夜國ハ満州：現在駐屯
せり此の以外更ニ山海關より之：増兵せしむ
ることと許さず其譎詐：巧なりと其矛盾の甚
しきとに流石の清國政府も果小返りて之に
は答辯を與へず

遼陽：於てハ 鉄道沿線十清里以内：居住する
各清國人：夜國退去を余りなり 右ハ之を以て

將ニ集伴せんとなす夜國大兵の宿舎：充用せ
んとす不慮なり

然るに現在同地方：駐屯せる四川の兵ハ頗る
紀律なく擅に商店の物品を奪掠するの風あり
より居り：人心恟々たりと大情報あり

天津度

夜兵は新民屯を占領せんとなす模様あり 電報
の模範頗る嚴重なり

アレキシーフは奉天停車場：總督府を移し列
車前後：機關車を附し警報あり 次第直に退

新民屯方面の情勢

アレキシーフ總督ハ
退却準備

却て心き準備を為せり

三月八日 (北京発)

遼河以西の中立問題：固く我當局者の意見
ハ存固ニシテ果シテ嚴正中立を守らば我國ハ
其中立を認諾せしむとせしむる如くなり
ハ存固ハ遼河以西の中立を以て自國ニ不利
益と認め固外一帯の地を奪はて交戦地域なら
しめん事を主張し居ること前覆の如く
袁世凱氏ハ廢親王ニ向て新然嚴の主張を排斥
し去るべしとの張硬意見を建議せしり廢親王

遼河中立問題
の切迫

は實力ニ伴はざる反對抗議を以て口舌の争ハ
ニ過ぎざりとなり 成行：一任一置くべしとの回
答と共にあり

然るに朝陽を中心とせし馬玉崑の部兵永平府
を根據とせし袁世凱氏の部兵ハ各三萬内外の
大衆に達し隱然一敵国たるの觀なき能はず
り以て清國政府の意志ニ懸念したる我國は
同政府が表面嚴正中立を宣言し居るに拘らず
右の態度の存在を以て以上明ニ中立を嚴守し居
るべしとの認識し能はざる旨を公然外部ニ移
深きに至りし而して清國政府ニして斯く對
手固ニ偏袒せしるの事實を見しハ我國政府ニ於

慶親王と袁世凱

てし別：取らばき道ありとの意を暗示して更
に清国当局者を威嚇して是れ朝陽方面の清国兵
を撤退せしめんを多分の手段と知らしむる此
に對し我当局者：於ては自ら臨城の處置あり
べきは勿論の事にして遼西の中立問題は大局
に於て至大なる關係を有するに至る可き模様
なり

陳兵所辦理に付いては慶親王と袁世凱との意
見合ふ袁氏の自己の推挙せる軍政士、軍令士、
軍樂士等を悉く辞任せしむべき意気を示し居
たり

遼右の被掠奪

遼兵の錦州一帯に於て暴掠到らざる處なく清
国地方官富豪等の財宝衣類等を掠奪し去らる
たり此の枚挙に遑らざるなり

三月九日 (天津度)

我團の旅順在留の外國商人は即時同地を退去
せしむる命令せり

我團の山海關附近に於て多數の牛羊を買入し
て此鐵道に七輪送るるを許さるる間道を通過し

旅順在留外人の退去

糧食の買入と監視

竊に輸送を計畫を爲しつ、又旅順の食料商店に露兵之を監視し一般人民は米穀の販賣を許さず

当地の國債應募額約七万萬圓に達せり

遼河以西は中立地と定めしむに拘うが夜國は之を無視して新民屯田庄を滿幫子等に兵を派遣し其他の地方にも偵察兵を絶えず派遣し山海關道の汽車に武装せる夜國軍人を見せしむるを而して食糧品は到る所に買収せしむつ、又加上新民屯の電報局に監視を附し

つ、又

此等の事實を綜合し中立地の實情を而して清國の各地守備兵は其數割合、多ううに過半数に上せし袁總督の軍は其大部分を關内ニ止り馬玉崑の兵又朝陽に止り前進の模様見江を遼西一帯の地方にあり支那官吏は中立の嚴守、付き全く不得要領なり現在、有標を以て見し中立地の中立は有名無実と謂ふの外なし

鴨綠江以南の敵兵は徐に退却しつ、又鴨綠江を挾んで決戦せん計畫ありん

我團の營口にて廿隻の支那船を徴發し石塊を積込み遼河の河口に沈没せしむ我艦の襲来を防ぎん計畫を序一我兵が遼河河口に上陸せしむや否やを探索しつつあり

タルニ一には官民を同じを總ての家屋の周囲地雷火を敷設せり他日我軍上陸の場合我兵の退却を急に當り之を爆發し家屋を裁ち占領せしむる爲りなり

營口砲台に敵艦は解氷と同時に美朱而艦の出

港を待ち自ラ爆發破壊せんとする模様あり

我兵の鉄道線路一断毎に番兵を附し之嚴重に監視し居り

三月十日 (北京夜)

我清銀行は其傾く金了北京大學堂基金五百萬兩に對し利子の支払を停止せしむ大學堂は経費支出の途なく款米に派遺せしむべき留學生の發見ル一時延期となすべし

日夜開戦以來、京官申請暇に託し、萬一の際兵亂を南方に避くるの準備をなすべしと云ふより、清國政府は是等の弊害を豫防する爲め、京官に強て請暇を求むるより、即時免官をばり、官内訓せしむ。

(天津發)

遼河は未だ解氷せず、遼國砲艇は依然入渠し居ず。解氷と共に、遼河の河口に水雷を敷設する筈にて、二百五十箇又は既に哈爾濱より牛家屯停車場

場に到着し、目下支々準備中なり。市中は別状なく、遼國巡捕兵の家具什器一切、昨日を以て競賣に附せしむ。小重量の荷物は停車場に送りし退却準備を怠るべし。

千五六百の馬賊、近來旅順近傍に出没するを以て、遼國の官吏及び清國人等公舎の會議を以て、三ヶ月間暴行を爲すに保險償として一萬五千弗を二期に分共せしむることとなり。凡そ八百の馬賊あり、之を五千弗の保險償と共に市中に漸く三ヶ月間小康を保ち

滿河南部の敵情

居少

八日附營口發の電報に據れば目下營口以南の
舊兵は約六萬に近く其大半は皆新募の兵なり
旅順に二萬金州に二萬復州に五千蓋平に八千
餘營口及び牛家屯に一千餘あり又遼河口砲台
二ヶ野砲三四門を備へ砲兵七十餘を備へ居り

三月十一日 (北平文)

奉天駐屯の常備軍は高麗三月内ニ補充の筈又

奉天の清兵の八旗
兵の訓練

天津にて訓練しつゝ此の八旗歩兵は現在三千
許りなり近々五千に増加の議定あり

袁世凱の袁總督

袁世凱氏は故天津の津之後既ニ十年の歲月
を経たり尚ほ公然の義儀を許されを其子
孫の民間に零落せしむ情又同志連名して近日
雪冤の上奏文を奉呈し且ニ嗣子の就任を奏請
せしむると謂ふ

日本軍人の捕縛の風

(天津文)

旅順及び滿洲各地に残留せる邦人の男若各地
と通して猶教者あり旅順より來りたる外人の

言に據るハ若干の日本婦人旅順ニ拘禁せし
つ、ちと、つ、

張之洞氏ハ南皮縣より天津一旦上京の上湖
北に帰任せざる

備地ニ於ける債券應募額は約十萬圓多し

(北平支)

奉天帰英談ニルキニ、天津督ハ現ニ同地ニ

留る、居る、旅順の兵は少敷を減留し、大

部合ハ鴨綠江岸に派遣せしむ、同時に清國

無賴漢の同地ニ入込み來るもの多し、白昼民家
を脅うて却掠を恣にし、又或は先日
來新ニ善蘭店と復讐の二箇所に大兵を集中し
居る、露國ハ日本軍の復讐沿岸に上陸せんこ
とを警戒し居る

二月十二日

(北平支)

總稅務司は、トハ、ト氏は各地稅關長ニ此
て日露兩國の發布せる戰時禁制品目錄を添へ
たる長文の訓令を發して嚴正不偏の態度を秉
るべきを注意せし

支那の電信局
押収

新民廠：歩兵百、騎兵二十騎：未着し同地の
電信局にて接収する電報は發着とも支那技師
之を檢閲し増祺將軍と北京朝廷との往復を監
督せんが存りなり

支那の牛莊河沿

又牛莊より的確報に據れば支那のコントング
イワチ少將等の部下五箇隊の歩兵を率ゐる同
港附近に駐屯し同時に五町の攻城砲二門を遼
河口に据え付り河口の封鎖は美米兩國軍艦の
出港を待ちて行けんとするの計畫にして兩々
相待ち以て我陸兵の上陸を妨害せん目的なり

とつふ

(天津支)

瀨川領事・出立

瀨川領事在中なる瀨川牛莊領事の一行は本日帰
國の途に就けり

支那の軍艦

營口にありたる露兵は漸次河氷に引揚ゆ居
り尚ほ同地：在留せし露人は當地に避難し未
だ引揚ゆ切らざり

張之洞支

張之洞氏は二日間滄津に在りて保定發の汽
車にて帰省の筈

美国汽船ホワクストンホーに便乗して北へ
降りた支那人の談：我輩は張順に破泊せし
諾成汽船の乗組員なり。不遇日未出港を差止め
り小又給料も呉れざるに由り此に帰るなり。ホ
ワクストンホーにて来りしものは皆船乗の
便乗者にして船客は一人もなし。日本艦隊は九
日午前十一時より午後二時まで又十日にも未
明より三時間砲撃し、露國側に非常の損害を與
へたり。

我艦七隻營口沖：現日小陸地に接近し探海燈

を照せしより露兵は狼狽し俄に砲台に準備せ
し。我艦は十合傾撃を遂げたり。上悠々引上げ
たりとの報あり。

三月十三日 (天津文)

營口露清銀行支店は閉店し店員は皆哈爾濱に
引上げたり。遼河は一兩日内に解氷を期す。

国外鉄道は山海関より東行の荷物輸送を停止
し、同時に溝帮子、新民屯間も東行荷物を取
扱はざる。數時禁制品の密輸出を防ぐに爲す。

なり

死傷の死傷者營口に送うる者多し凍傷の者
も死傷せるものなりと云へり

コンドラット將軍は數萬の兵を率ゐて營口に
来しとの説あり營口の英國領事は在留英人
に引上を報告せり

三月十四日 (北京發)

清國銀行は官廷官吏への貸金を督促しつゝ、

りる：内官等狼狽して白雲館に密會商議しつ
、なり

牛莊駐在米國領事の報告によると、露國ハ不日
四個縣派を同地ニ集中せしむとの風説ありし
民心の動搖甚だし、猶又露國は遼河の沿岸に砲
臺を増築し防禦準備に汲々たり蓋し馬玉崑の
關外出兵に對して示威運動なりん

(天津發)

山東省順德府及び山西省潞安府地方に土匪蜂
起し佛人ペリオトなる者難に遣ひ行方不明と

安東の敵軍運送

なり鉄道技師伊太利人某も亦難に遣へり其外
同地一帯の外国人二十四名殺されたるなり
と傳へり清國地方官は兵員を派遣し鎮壓
從事しつゝなり

安東縣沿岸の新設砲臺は晝夜兼行にて工事
急ぎ居り孫王庄比里灘の西砲臺は既に完成
し他の五砲臺も數日の内完成せしと傳へり

駐清米團公使は安東縣を戦争區域より除き同
地に兵隊を駐屯せしむるが旨外務部

駐清米團公使の
照會

ニ照會せりとつゝ

營口外人の引揚

營口の外国商人は曩に商務に妨害あると恐り
開戦を避けしむるにアシキに請願せ
し其知事より大に同總督を恨み居り
り同地の覆國官更中にも同一の感情を抱き
居りしなり猶日本兵近々上陸を心とて同
地の外国人は昨今陸續當地へ引揚ぐ

三月十日 (天津発)

多敷の敷設水雷香港より營口に着せし遼河

多敷の敷設水雷

口の解氷を待ちて之を布設に着手する計畫なり
右の解氷は今より約十日後なるべし

(北支度)

ゴゲンガイ氏は湖北の兵二千四百を引率して
通州に來り馬玉農の不在中同地に駐屯する
事なり

旅順口より通信に於て我國の糧食は世評
の如く甚しく不足し居らざるも洋藥欠乏の一
事は掩蔽せらるる所なりといふ

清國の通商手続

旅順の環壁

三月十六日 (北支度)

北清駐在武官オゴロドニコフ大佐は馬玉農
氏の出発後通州に到り我軍人の之に随行し居
れりや否やを調査し直に馬玉農氏の跡を追ひ
度足し熱河に於て一昨日之と會見し居るとの
報者地に達せり

右は馬玉農軍の軍中に我軍人のあるを察し之
を勤作の調査を命じたるに依るものなり

商務部は滿地の實業家に対し商業組合を設け
其登記を命じ居る旨を通告せり

清國の報

商務部の内幕

各開港場に及ぼす等なり

(天津夜)

遼河の解氷は二十日より二十四日迄の間な
べく美米両艇の出港を三日来月三日頃なり

營口の敵艇と
守備兵

營口に在る敵の砲艇は既に既ニ橋を切り
取リ一か或は其傍砲台の代用をなさん模様なり
同地の守備兵は極少の教にて此等は牛家也
と畫來り夜は引揚けつゝなり

營口被台領之隊
期々

營口税関の官吏其他の英國人は家族を当地に
送少し同地は開河と共に日本軍に台領せし
べいと信ぜしる馬賊は同時に蜂起し砲兵を擧
げんと意気込み居少し

遼西中三ノ実

清國は新民屯及中溝諸子等より續々多量の食
物を関内に輸送し居少し遼西一帯は露國の徴
税を避けん去り住民に要する夫の食糧を以て
其餘は関内に輸送し申立の實を擧ぐるの計
畫あり

馬玉崑の畫

馬玉崑將軍は其副官二名を奉天に派し又番使

と吉林に送る連絡活動の方法を講じ居り

馬賊は目下沈静の状あり居り露國にては買収
具効を奏せりと揚言し居り

三月十七日

(北京友)

昨日奉天より 遼 難し来小る 支那官吏の 直轄に
戸 總督は現に同地の 露國兵營に 在り 右大腕
骨に負傷し居り且事實に 歩行の際に 跛歩を
或きつり あり 増視將軍は 露人の 壓迫に 能儀を
くせり 小露國の 居る 各種の 軍事的 便宜を 共

今回更に二千人の馬賊を募集せし程あり其
の本心より 露國に 帰服し 居るに 是れを 將軍
は常に 本年八十餘歳の 老母を 有せり 居り一
死團に 融ゆること 能はざるを 遺憾と せり 肯明
言し 居り 露兵の 不規律に 言語 通訳に 旅行
者にして 彼等の 爲りに 金錢 衣服等 の 掠奪を 免
れしむる あり 余の 如きは 途中 車を 奪ひ 去るに
困難を 極め あり 多数の 日本人 を 愛護し 彼地
に入 込 居り あり 祝高き あり 旅行者の 取調
嚴重に 殊に 秘密 信書を 往復に 注意し 居り 模
様なり 物價の 騰貴は 平時に 比し 三四倍に 鶏
一羽 一兩 鴉片 一個 十錢の 相場に 是れ 余は 旅行中

麵包一箇に二串を支払ひしことさへあり余の
出産前数日の事なり午前二時頃俄に非常刺
かの声けたる、早く軍馬の往来織り不始く霞
兵狼狽の状兵事ならむと思ひたるに翌朝に至
り全く露國哨兵の敵軍の襲来と誤り傳へたる
に因由せしこと判明せし其の妙なり日本人の
襲来を恐怖し居るるを想見さへし土人の憂慮
は全く露と離れ居れば彼等が筆食壹柴し之日
本軍を逐へんこと疑ふべくもあらざる云々

三月十八日 (北居実)

賠償金補償の
請求

西大倉は古稀慶典挙行の内意を軍械處大臣に
授け外部大臣と在在外各駐紮公使に電諭せ
しむるに各國と商議し本年分の賠償金を松橋
豫を求め之を慶典挙行の経費に轉用せん事と
以てせしむたり

達在中立と
意思

袁總督は能く達在中立の實行と期同し先頃
總督に向ひて兵にし濫り達河と越中し如
き事あらん可我國の自衛上開戦を布告せし
可らぶと告と通告せしやの説を中央政府
は例に依て例の如く備らむを方針と執
り居り

總稅務司ロバートハト氏は京官及び各省地方官の俸給を増加し以て政府部内の繁栄を一掃するの急務を説き又不財源として一畝に付青鉄二百文の地租を増徴せしむべき事を建議し之を軍械廠の各省督撫に余亦之に地方の情状を査察し之を急督府の意見と復答せしむべき旨を以てせし此ハロバート氏の豫ての意見なり一に先月二十二日年賀参内の上御堂席より直接中下両方より好機とて建議に及べたるルヲなり

牛莊河口に攻城砲の外野砲十四門クルヲ砲九門を据付くる等にて義園は同地を死守せし意気込なりとの報あり

鳳凰城に現在の義兵は歩兵二千、砲四十門あり

(天津度)

義園は海城遼陽を中心とし鴨綠江に向付二通り兵を進めし防戦せし計畫なり此項に對し我兵は牛莊方面に上陸せしと豫想し遼河の廣原にて戦ふる奉天に退却せし何れあり

の一を取ることとなりしと云事なり目下の状況にても彼は旅順半島を奪て、北部に退却する模様なり

營口の美國領事夫人其他外國人廿餘名山海關に引揚り去り、同地方面不戦年の評判に恐怖を感じ居ると思見するに足る、兵は先行し極々居り支那人の營口より引揚る人も、昨今非常に多く汽車は毎列車満員にて混雑を極む

三月十九日 (天津夜)

牛莊：旅しては小麦粉缺乏に非常困難を以て多方を問ひて至急運達せんことを同地美米領事より當地の西國領事館に電報あり、これに付小麦粉二十八萬斤を美國兵に護衛せしめ、明日當地を發送せしむることとなり

右牛莊到着の上、美米領事館に保護し、決して他の外國人に賣渡さるる約束の下に袁世凱は園内外鉄道にて之を輸送せしむることと承諾せり

三月十八日 (天津夜)

張上洞氏の本日當地を度し上京せり

仙波駐屯軍司令官は各部隊校閲の爲に 巡視の
途に就けり

三月十九日 (北平支)

韓国公使閔泳詒氏昨日函官に謁見圖書を拝見
す

三月二十一日 (北平支)

マカロフ大將はレフサル公使を經由して 外部

に向ける露國の海岸防禦の必要あり満洲の沿岸
一帯に地雷を敷設するに付貴國民の商船を
て海岸に埋以内の距離に接近せしむべし
とを望む第一旅順大連等に入港せんとす場
合には謬の信疑を以て其意を通じ水先堂等と
伴同小たす旨を照会したり此の照会が匪總督
の名に依るを殊更マカロフ大將の意を以てせ
し小たすは意味あるらるると思はる

(天津支)

露兵の營口の防禦を嚴重に—商賣の全く中止
の爲なり馬賊横行し強盜殺人頻なり露國警

敵の遼河開塞
計畫

蒙ハ慶シ之ヲ取締ラキ猶露人以外ノ各外國人
並ニ支那人ノ多クハ大抵同地ヲ引揚シ汽車ハ
毎日滿員ナリ

兵ハ日夜工夫ヲ督リテ遼河砲台ノ修築ヲ急
シ且フ遼河口ヲ閉塞スル爲メ支那船ヲ買入不
人とセシム直段安クシテ應ゼサスルヲ欲シ價
と論セテ一二十隻ヲ買入ルルヲ、セリ

目下哈爾濱に集合セテ敵兵ハ約五萬アリト傳
へラリ

哈爾濱に現在敵
兵

三月二十二日 (北京支)

總稅務司赫德氏ハ官吏増俸地租増徴意見ニ對
シ袁世凱岑春煊ハ賛成ノ意ヲ表示セシム張之
洞氏ハ絶對的反對ナリ

西太后古稀慶典ノ經費ハ光緒二十年に行ハレ
左ノ大向萬壽節ノ例ヲ標準トシ其三割ヲ減ス
ルハ旨内諭アリ

保定常備軍力補充トシテ袁總督ガ山東にて募
集セヨ歩兵八千ハ既に北上ノ途ニ就ケリ

地租増徴と袁
張西督

西太后古稀慶典

保定常備軍補充

(天津云)

鳳凰城より報に據れば同地ハ糧食軍馬等の
後方野營所となり鴨綠江に至り四五六里毎に
大砲を備へ守備兵を置き通行人を嚴査し居り
乙同所の毆那官舎民屋旅館等皆夜兵に徹夜せ
らるゝ又那人の其の大半は逃避せし夜兵の掠奪
甚しくして地方官之を如何ともし在り能はざると
いふ

三月二十二日 (天津云)

アレキにして蕪湖督は清外務部に対し満洲海岸
一帯五哩を隔つた處に凡て水雷を布設し居り
旨通告し来り居りし處地にてハ不可能の事な
れば之を以て威嚇的符言なりと一笑に
付し居りし

順天時報社の募集せし滿洲善後策懸賞論文数
十篇を通読し略清國輿論の在り所を窺知在り
と得たり即ち
第一、清國人中苟も日本の事情を孰知在りし
れば日露戦争の結果が必然日本の勝利に歸せ
べき事を確信し居りし

第二、我軍に勝利の帰したる時、日本政府は前約を履みて満洲領土の保全と主権の確認を各ならせらるべし其名を避けて其実を取らばければ、鉄道と鑛山との利権は悉く日本の掌握する所となるべく豫想し居らるべし

第三、滿洲の各要地を開放して通商港と爲すべし

第四、滿洲官制を改め他の各省と同しく特別の地方官を選擇して吏治の刷新を期すべしとの説は千遍一律なり其他東清鉄道を清国政府の自辦とせば事を言へる所のあり

第五、戦費の残金を日本に辦償して可成我權

東清銀行と
金銀行

利の要求を軽少ならしむる事

第六、蒙古兵を訓練して其の領土に接近せしめ、辺境の防備を嚴にせしむる事を説きたるなり

北京大学堂は再三督々未漸く東清銀行より利子の支拂を受け更に滙豊銀行に轉預したる清國下民は日露開戦前後東清銀行支店より百二十萬兩正金支店より四十萬兩内外の預金を引出し改めて滙豊支店に轉預せし旅順の勝報あり以後正金支店は續々預金を得たりし東清銀行支店は益々非違に隔り居る模様にして大子

領事利子の如きも故意に支払を拒絶せしむるにあらざりしと資金の廻らざるより止むらく破綻を暴露せしむる、如し

三月二十四日 (北島費)

牛莊港の全然解氷を以て最早今日の中なるべく美米二国軍艦の出港を而近々なるべし其後に至りて露國ハ豫ての計畫の如くジャコウの砲攻を行ひ以て海口の閉塞を企つたらん左ハ其同處に潮流隨了急なるべしを以て其目的を達したること到底困難なるべし

との情報也

マカロフ中將は其旅順到着後士氣の沮喪せしを見て頗る憤慨し敗餘の残艦に至急を修繕を行ひ敵艦未侵入すは花々しく最後の一戦を行ひ以て成るべく敵に損害を共へ以て我將士の士氣を鼓舞し且つ歐米の同情を博せんことを力むる外今日に於て策ある旨皇帝に密奏したりと云ふ

三月二十三日 (天津発)

拘禁邦人の放免

東清鉄道の汽車内ハ外國船長と共に海關と
披見し居りし處にて旅順に長く拘禁せし小居
リし日本人ヲ千アミ中谷の西氏は營口より米
園領事の交渉ニより放免せし營口に残留の
我婦人四名と共に明日頃當地に來りならん

遼河解氷之引揚支那人

遼河の解氷は寒氣の存り極西三日を要すべし
解氷に至らば流水により對岸なる停車場との
交通暫く杜絶すべし故昨今營口より引揚ハ
支那人汽車に満ちり

三月二十四日

(北京發)

兵部尚書と吏部尚書

津鎮鉄道と英樹

禮部尚書傅良氏は兵部尚書兼任し又外部會辦
大臣瞿鴻禨氏は吏部尚書兼任を命ぜらる

獨逸は英國が急に津鎮鉄道を布設し以て江西
鉄道との聯絡を圖らんとを望み居るも英國ハ
急速に該鉄道を布設するの必要を認めんとて
容易に着手の様様なきより獨逸公使ハ外務部
に照会し英國ニして若し何時迄も布設に着手
せざる様をうか全然其の布設権を繋固に與へ
ら小度肯交渉を重んずるなり

津鎮鉄道と袁
獨(劉毅)

閩外支那人と袁
總督

クハバトキン將軍

(天津矣)

英國が今猶工事に着手せざるより獨逸に天津
鎮鉄道の南部を經營せんことを申込を以て袁
總督は承諾し難き旨獨逸に回答せり

袁總督は閩外の官民に汽車無償券を共一又南
清地方に歸るものに汽船無償券を共一と旨布
告せり

三月二十五日 (北京發)

クハバトキン將軍ハ今明日中に哈爾濱着の候

定なり月末迄にハ遼陽に到着すべく同地にて
ハ既に宿舎の準備中なり

クハバトキン大將ハ一應奉天に來り了レキレ
ハ總督と打合せの上哈爾濱に返返り同所を
以て司令部と爲し滿洲西比利亞の陸兵を指揮
す可しと露國士官ハ語少り

鴨綠江方面及び遼陽附近に露兵ハリテウイツ
ク中將之が總指揮官なり

牛莊の露國兵ハ同地ニ在り英米人の居位を以

袁軍總指揮官
の所在

鴨綠遼陽方面
の指揮

牛莊の防備と露
の所在

清銀行の支払
拒抗

て日本兵の上陸を恐ると否との標準となり本月
に入り英米人續々引揚げ天津方面へ来りより
必定日本兵上陸の内通ありし故なりんと想像
し一層防備を厳重にせしに至りし

清銀行の其保管せる北京大学の基本金五百
萬兩に對する年四分の利息に對し千八百九十
一年度より言を左右に託して支払はる勸学大
臣張百熙より種々交渉を受けたる末去月末一
今年分丈け支払ひしに直に右を香港上海銀行
に預入ししとの理由に依り當地清銀行支配
人口の子に日残餘の支払はむと苦情を唱へ

張氏ハ昨今嚴談中なりト

我國ハ朝陽一帯に配置しある支那軍の行動を
探查せん爲り天津牛莊兩方面より細作派遣せ
り

清使の中立違反
詰責

我國遠征の苦
二

我國公使ハ外部務に向ひ清國政府に表面中立
を聲明しなから暗々裏に各種の便直を日本に
共へつゝあることと不都合を詰責し其実例と
して登載し上陸せし我水兵の西式の手續を
經由して本國に送還せし事及び日本に運送船
不属し是等及ハ覺城灣に寄港せしに拘はるを

被拘禁邦人の後

税関長並ニ地方官等ハ實に之ヲ拒否せざるの
 刃ならん及ニ種々の便宜を興へつゝあるを以
 列挙せしむ右ニ付總稅務司ハ一昨日並ニ關長
 ニ花ヒ事務所ニ調査を命じ且つ稅関吏々々ハ
 嚴正ニ申立圍ノ規程を遵守せしむ旨を訓令し
 たり

(天津宛)

長々 旅順ニ拘禁せしむ居りし朽調宗一、中谷
 幸次郎ハ二氏ハ本日午後當地ニ着せし其後
 所ニ於てハ二月七日並ニ岩崎幸次郎引揚の命を
 リ知ハニしし乗車して南周嶺ニ至りて停車

夫此時(威那)汽船リクト號船長諸威人某ハ奉皇
 島附近の地圖を手にし居りしを守備隊兵に認
 めし水詰問さし居りし其言語通也を朽調宗一
 之を見し通辯しやりしに免れ角士官の取調を
 受くべしとし兩人を引致し中谷氏ハ跡ニ
 隨ひしと同類なりしとて同トく引致せしむ
 士官の取調をを受けし時有の供言實を述べた
 りし間入水ししを旅順ニシ辯明をべしとて直
 ニ同地ニ送しし守備隊ニシ取調の上同夜ハ同
 所ニ留めしし故總代事務所へ取調をせしむ
 たり事務所ニ多々魯某不出張し軍事上
 の嫌疑者ニあらむ言訴へたりし是亦聞入水

う小が三人う始末書を出さしめたる後参謀
部：廻り小明日決死心と告げたるも其翌日
ハ取調べしなく其終司令部：轉送せし小舎に
又監獄：拘禁せし四十餘日の間收監の身と
て少く其内開戦となり具：辛酸を嘗み英國領
事（未開）：ハおらざる可くハ交渉：より漸く
放免せしむるなり目下哈爾濱警察署に我婦
人十名保護拘留せし居り左ハ清国人の妾
なりハ可遣去し小左なりと云ふ旅順ニハ
尚一名の邦人岡某軍事情報の嫌疑ニハ拘禁せ
し居り又婦人五名ハ保護收監せし居りハ
不両名と同時ハ放免せし小當地に送還せし小

多し曩ニ九十名の婦女拘禁せらるるとハ風説あり
リハ此五名なりハ不ハ目下南海湾に残留
在り邦人の旅順ニ三名遼陽大連に各一名の婦
人ありハハ孰れハ露国人の妾ニハ中ニハ露国
ニ帰化せしものありハ聞くと露国警察ハ頻りに
ハ残留邦人を捜索せしも其他：ハ一人もなし
といへり

三月二十六日 (天津發)

滿地の漢字新聞直方ハ露国ハ買収さし居ると
ハ説き常ニ虚誕の説を掲げハ不昨日清官ハ

漢字新聞直方
停止

り發行停止を命ぜりし

中谷 杉田が捕へりし旅順より
二一に至る途中に拘禁中最初食物は自辦な
りしに官給を仰ぐに黒心、米、麥飯、ソ
ッポを共へりし其後、或は生肉を或は鰯
詰或は鯉肉を共へりし以て食糧食料の缺乏を
推知せしに是を賄賂を共へりし煙草毛布新聞
紙等しは既利ありし十イフを以て買ひ合はりし
旅順在監中消費せる金額は二百五十四に上り
り其後同し如く軍監獄より警察監獄に移し
たり十日の砲撃して支那人街に殺人焼棄

被拘禁邦人談話
後報

さし、露国大將警察署長負傷せり中谷は、大尉杉
田、少尉と認めし居りしに在監中何人し
訪問を受けざりし監内にては復讐を共へりし
かりし放免に就ては米國領事の尽力非常なり
き放免の時、昨夜十二時にて直に汽車にて送
りし小なる故車外の実況を見たりし警に
は多し米國領事館にて保護を受けし出發せり婦
人の内二名は蓋平露商の妻にて先月中旬營口
に向け出發せんとせしを捕へりし他は三名は
旅順露商の妻なりし不聞戦當時に在留を許さし
し七本月初旬共に警察に留置せりし一室内に
置りしなりしとソふ各婦人とも身服と着し行李

十の増へ先の避難民の比にあらず

各團船舶の河口に侵入んとせしむるの河口五哩の地位に在る浮標の所を以て検査を経たる上午前六時より午後六時迄入ると許さずとなす

露國のり子ウイッテ陸軍中將ハ滿洲軍司令長官に又スラフエル中將ハ遼東軍司令長官に任せらる

クハバトキン 將軍ハ本日奉天ニ着キ明後二十

出帆は出入り各團船

右軍司令長官

クハバトキン奉天着

八日遼陽着ハ陽定なり

(北京談)

日露戦争後の經營ニつきてハバトキンハ一氏ハ兩宮ニ奏上せし意見に據りハ曰く今後清國ニして各團の海を禦せんことを欲せば軍備の擴張を以て第一の急務と看さるるべからず官吏の増設各局課の整頓ニつきてハ之ハ財源と地租ノ取るを以て適當なりとせしむる云々尚ほ地租徴収の標準ハ氏の案ニ從ふ之を當國の一畝中ヲ我ニ百八十七坪ニ對して一兩の一分を課せしむるにせしむる全國面積の半分を耕地

總務司の財政意見

と見積り之に右の税率を課すハ能く四億萬
圓の歳入を得べしと云ふ
右意見ハ西宮の嘉納を所となしたるを以て
氏ハ之を印刷ニ附して右替換ニ配付せし丸木
也ハ同或ハ本日訪問せし予に對して尙圍の現
勢より寡小ハ之を實行極つて困難なるべし云
々と語りし

清國より之を戦時禁制品なりとて満洲に於
ける我國軍隊ニ供給せざる物品ハ朝鮮方面に
ル亦同じく之を輸出せざることニ總稅務司に
於て畧ぼ決定せし

通商條約改正後清國政府ハ直ニ商標登録局を
設置せむべしと云ふる著なり今ニ至るまじ
遷延し過日未由田、コンカハ西公使の督促を
受け漸く商務部に於て右法案の漏算を行はる
り斯くて其草案は既に成立したるも未だ發表
せしに至らば

三月二十七日

(北原彦)

露國政府ハ迄ニ鄂推を廻し清國を以て日本と
通むるものなりとししワサー公使を以てたす

抗議を清国政府に呈せしむる

曾て吾国の反對を唱へたる遼河以西の中
地に清国その防備を嚴にせむと他日日本
軍の上陸に對し其便宜を共へんが爲りなり
朝陽に馬玉崑の兵を配置せしは吾国に對し
敵意ありとの故なり

上海に於て清国人の發起せる赤十字社ハ日
本軍に便宜を無しんとせしむるなり云々
何れも勝手次第の理屈を附しをりしめられど
ルレワサー公使ハ訓令により餘儀なく痛を推
し右の趣を外務部に傳達せり
左れど幾度し吾国の咽喉を経險し其實力近

未稍や發覺し来りたりしハ清国政府ハ此抗議に
對し何等の回答を與へ其得手勝手なりと
一笑に附し居り

西班牙公使ブランコ氏昨日乾清宮に於て西宮
に謁見せり

吾国人一名昨日庭和宮の喇嘛僧に混じり北
口方面に向ひ當地を出發せり支那軍情偵察の
爲りと察せらる

英國公使ハ一日昨日慶親王を訪問し七時間の談

西班牙公使の参り

支那軍情の偵察

英國公使の慶親王訪問

話を居せし

通和の苗奇情軍

通和ハ吳元凱の統率也。湖北後軍二千四百
人と夏辛酉の銃帶也。山東兵二千馬玉崑提督
出發後ハ留守とて駐紮し居少し

袁世凱麾下の
新募兵

袁世凱の親募兵ハ保定に一個師團天津に一個
師團合計二個師團にして此等ハ山東ハ西部安
徽ハ南部河南ハ北部等々徴募せしものにて
精銳無比と稱せし。三ヶ月間に達成訓練と施
在等々

袁世凱の馬匹送還

袁世凱ハ松花口及び其附近ニハ馬匹數百頭ヲ買
入ハ滿洲に輸送しつり

(北平産)

袁世凱の政略の
報

袁世凱ニ在リテハシキニハ總督の參謀長ナルコ
ト將より當地ニ達シテハ電報に依リハ昨日早
朝日本艦隊旅順口に至リ袁世凱軍艦港内より出
逐ハ砲火相見えし。日本艦隊ハ力戦を及ぶに
し退却せしとあり

遼東の軍情

北平に於テハシキヤシキトシテ少將ハ騎兵一小隊を
派遣して我兵の状況を探しし。博川江にて我

が騎兵に遇ひ互に攻撃を爲せり

三月二十八日 (天津元)

袁世凱氏ハ赤十字社を新設し各國に照会し之
聯絡せんことを外務部ニ電報せり

奉天將軍の電報ニ露兵ハ安東縣沿岸ニ衛壘を
造り通台ハ通溝子に駐劄し材木ハ皆差押へら
れ且つ税金を徴収する不故同所の関税ハ四月
より停止中なりとあり

清國軍士在任後

安東縣露兵の據拠

清人自營

東邊道台張錫鑾は砲兵一營と馬隊八十を募集
し商民保護の用に備へたり

露國ハ支那兵を以て軍用區の供給を代務せし
りんと増祺將軍に迫りたし奉天府尹ハ之
を拒かり

奉天府の金鑾殿金銀庫大學堂等露兵の占據を
了所となしり城の内外の清兵ハ二百清里を距
り北里山ニ移らんとし説あり

奉天遼陽間交通杜絶せり馬賊蜂起の説あり

支那兵を以て糧食
を供給せり

奉天の露兵

奉天遼陽間交通
絶つ

いなり奉天より鉄道による清国人の通行ハ許
されず

(北京宛)

牛莊港に碇泊せし英國砲艦工スビーエーカハ號
の事につき暗に露国の委嘱を受けたりと覺し
く某美商ハ多數の英人を勧誘して保護の名の
下に右砲艦の駐留を破望し之をサトウ公使ニ
歎願し左より同公使ハ予に語りて牛莊港の戦
地となすは蓋し免る能はざる所なりハ砲艦を
駐留せしむること能はざる豫定の如く来月早々
其滿潮を待て出港せしむる筈なりと云へり

駐留と英國砲艦

赫德氏清國財政改革案

ロバートハート氏が建議せる清國財政改革案
見ハたゞ如し

同氏ハ先づ日露文戦の結局と同時に中立の大
難必お起るべく此時に際し他国の指使を受け
むしり却て我言を聽らしめんを欲せば今日の
好機ニ乘じ努力して自強の道を計る要を自強
の道は主として練兵ニ在りしと中國現在の収入
ハ関稅塩稅地租等ハ頂目と合を以て八千萬兩
ニ過ぎざる而ル其大半ハ國債償却のため費消さ
れつゝある始末なり別に歳入増加の方法を
改革せざるべからざれば卑見を以てせんハ地租整

理を以て最も適當にして最も確實なる収入となす土地面積比例より作地の反別を八十億畝と算出し一畝に付銅錢二百文を賦課せしむれば地租のみにして一十年八億兩を得べき計算なりとも歲に豊凶あり地は肥瘠あり心算収入は其一半即ち四億兩と仮定して大差なるとべしと云ふ又次は地租徴收方法は就き章程の煩瑣は其項を遅緩ならしむべし心成るべく之を簡約ならしむべしと便法の概略を説き最初一縣一府より試験的に着手し漸次十八省に及び一三年を期して全国に推行せしむべしと云へり借て其収入は如何に支出せしむべきに就ては次の

諸項を列記せし

(第一) 全国の陸軍を四大部に分ち直隸兩江湖廣西廣の四省に徵募せしむる毎部の兵數を五萬人と定め十箇年の後に八常備隊備後備を合しして五十萬の陸兵訓練を完成せしむ軍備學堂四箇所の開辦と彈藥の費類とを合し陸軍の經常費五千萬兩

(第二) 海軍を再興して南北洋及び適當の場所を三ヶ所の軍港を設け一軍港は大小軍艦二十隻水雷艇六十隻を浮べ水師學堂三營を創設し以上の經常費及び臨時費合計毎年三千萬兩

(第三) 機器局四ヶ所を改善し其費用の見積

一千萬兩

(第四) 京官及び地方官の俸給増額全国各衙門経費雜費等一億六千萬兩

(第五) 教育費一千萬兩

(第六) 郵政費一千萬兩

(第七) 電報局経費五百萬兩

右郵電二項ハ漸次收支相償して餘りありて至
るべし

(第八) 宮廷用費一千萬兩を支出す

地租の歳入四億兩の中より以上諸項合計三億
二千六百萬兩を以て豫備金として關稅増稅の歳
入約四五千萬兩を以て悉く外債償却に充て其

完了の後には委細此等の税目を免除して漸次自
由貿易の方針を取らべしとつかはる

三月二十九日 (北京電)

清國の嘉十字社加盟ハ傳倫貝勒と載振貝子と
の提唱に依り倫貝勒ハ今回の渡米を機として基
金の募集を同地在留の清國資本家に提議する
等

清國譯學館は今回制服として純然として西洋服
を着用せしむとすなり

清國と万国事
字社同盟

清國と西洋
服

肅親王地位

肅親王ハ悉く重要の官職を免せし居る處
反對派ハ切リ、同親王の權力失墜を云々、居
れど余の確論を所に依り、西太后皇上兩陛
下の御信任ハ昔日と毫も異ならず所なく百日の
忌引満了を俟ちて別に要職を授けらるべき御
思召なる由

南河に送るべき
支那労働者

天津順記洋行は杜蘭瓦金礦所有者より支那勞
働者カ僱入を託せし、其勞賃を支那タイク
紙上に廣告せし、其條件ハ往復旅費食料醫藥等
ハ雇主の負擔にして賃銀一箇月二十五志を最低

と一僱入期限ハ三ヶ年とす

西班牙公使の勲章
捧呈

西班牙公使ブランコ氏ハ一昨日謁見の際同國
ハ最高勲章を皇帝陛下に捧呈す

(天津矣)

露國ハ營口に於て貨物積出に關する戰時法を
發布一日韓兩國に輸出せむ、保証金として輸
出貨物ニ對する代價の金額を税関に豫納する
事と定りたり

營口ニ於ける貨
物積出法

營口碇泊外國船

營口ハ外國汽船五隻既に入港し居り

樗船巡洋艦ハシガ太沽ニ入港セシ一昨日秦皇島に回航し乗組員の手教に上陸を許し

クハトキン 將軍ハ遼陽に向テ奉天と出發し

營口在留の外人は去り二十五日集會を開き今後若し同地方が戦亂地となりて夜軍敗走の後日本軍到着して軍政を布く迄の間如何にして暴民の掠奪を避くべきやの問題に關し評議したる結果三名の委員を選み英國領事を經由し領

事團に向つて在留外人保護の方法を確らむるととなりし、猶右評議會に於てハ露國が治安を保持し市街を整理せよきは本會の信任せんと欲する所なる旨を決議し、露國の回答如何より更に自衛の策を講むる事あり

營口砲台の敵艦シウイタ未だ出港せじ前電の如く浮台場となすことに決したる模様なり

去り十六日食糧品を積み込み秦皇島より旅順及び營口に入らんとせしジャンクありし清國軍艦に長押へられ没収の上公賣に附せしむる

那桐氏の處置

三月三十日 (北京発)

那桐氏が就任匆匆工巡局の技師タツクスホー
ルド氏を解備せし一事に多少外人の非難を招
きたるが同氏の獨進んで肅親王の推挙せし總
この局員を漸次罷免をへしといふ風説頻りに傳
へらる

吉林より来京せし支那人の談にいわく本國よ
り派遣せし俄兵の多数は老人年少相混交し制

新募兵の概

服亦同トヨウが支那靴を穿つもの往々之り
平素の準備なく急遽突嗟の間召集したる形
跡歴々たるといふ

三月三十一日 (北京発)

露國通譯官の
自殺

露國公使館一普通譯官コレソツソフ氏昨朝短
銃を以て自ら其頭部を打貫き即死を遂げたる二
発の中一個の銃丸は度見せられたるも一個は
深く脳裏に侵入し居りて抜き取り能はぬ同氏
は公使館内にしし唯一の支那通と稱せし支
那側の事務ハ殆ど一人の手にて捌き居たる程

西太后萬壽節

前各國駐津公使

：此平生酒癖ありと云ふ外、ハ原因と認むべ
きものなる個人と見ゆ。至つて好人物なりし
由

西太后の萬壽節にハ戶部より四十萬圓を支出
せしに次ぎ各督撫よりハ銀金額ハ未定なり
ハケロフ氏ハ近日中ニ上海より天津ニ来り夫
より奉天ニ至りアレキニ一ノ總督の下ニあり
ニ外交事務官長たりべしとの説頗る高し

(天津夜)

營口戒嚴令と
英國領事

營口駐在英國領事ハ露國より戰時法令を出し
たりし公使より何等の指令あり近ハ服従する
に及ばず時局に對する保護は本官其任に當り
しと自國民に諒達せり

營口商光

四艘の汽船營口に來りし僅の期間を利用し
て危険の商業を營口んとせしものにて取扱店
ハ非常に困却し上海に向け當分汽船を送るた
りしと電報あり

營口ニ在る英米
軍艦

英米兩國の砲艦が營口を出港せしは今分五日
なりん

上：上り

分捕を目的にして希臘人アルメニヤ人の来りも
の敷うらにらにて兵軍ハ警戒し居り

當地の支那銀行より管口に輸送せし銀塊ハ既
に四十餘萬兩に上り目下同地にてハ四割高
の相場あり

銀塊輸送と其相場

明治三十七年四月分

北京天津電報集

四月一日 (北京發)

太孤山より鴨綠江に至る要處々々に露園騎
 兵配置され安東縣より九連城に至る山上に
 堡壘を造り砲台を築うんとあり計畫あり如
 何せん大砲などを以て唯かに木山に大砲八門
 の据付を終りたるあり
 又同方面に於ける海岸に材木を積み外部に
 泥を塗りて防禦工事を行はせり
 露園女将カシクリンスキは安東縣にあり同
 方面一帯の兵数につきては不明なりと云ふ多

在外清國公使の電文

分一軍團を起さざるべしと同地方より情報ありたり

歐米各國に駐劄せる清國公使等八名の連署にて臣等各駐在國政府の意見を探問せしに日清事件は久しうらむして平和克復の望みありし清國の困状を以て現時の終なきは一波僅に収まりし一波又起り四疆分割を終ふことなきを恐るると言ふに於て各國政府の見ふ處大同小異なり臣等以て我が國若し此機に乗じて變法自强を計らざれば大禍の起る將に遠きに非ざらんと云々電奏に及びたるに皇太后

后にハ之を見て喜を給はせり色あり朕を如何に變法せしめんと云々右の電奏を地に擲ち給へりと聞く

古稀慶典の恩賜

皇太后古稀慶典に付ま那桐 徐會澧 增祺 鼎鐸 魏 純 毓 等 現任の大官六人の老母七十歳以上ナルカに限り御筆扁額 玉製如意 絹織物等と下賜せられたり

四月二日 (天津発)

營口にシ米團人ら支那家屋を借入ル集會を爲

支那團史の記述あり

敵 高船 宣戦

一 米國々旗を掲げたり一に敵國官吏ハ其國旗
を引却さしつたり

去月廿九日敵國艦隊司令長官ハ汽船と帆船と
と論せし橋頭に國旗を掲げたり又夜間點燈せし
しと戦闘区域に入り来りたりルハ河國の
船と馬も敵艦と見做し撃沈せしむる旨告示せり

レリリノイの坐態

敵國側の孫順電報に水雷艇二一リ又イ日二十
七日日本の汽船四隻に對し悉く水雷と發射し
たりハ港外に二日本水雷艇六隻に打ち水二損
所を生じ一決瀨に坐態せり一即死六名重傷十三名

蒙古王の意旨
供給

たり

或蒙古王ハ奉天に向け畜蓄一萬頭を輸送せし
約束せり一敵國ハ之を旅順に送り若し天津
の支那商人ハ右運搬の請負せり一營口に送り
たりに同所の敵軍ハ何故か奉天行を差止めり
として該商人ハ歸津せり

在牛莊美未軍
艦の新勢

(北京発)

牛莊に冬籠りし居たり未開砲艦へし十號ハ本
日同地を出港せし(苦なり)
同トく美軍艦エスピアゲル號ハ新東洋艦隊

司令長官ノ一エハ中將
ブリフチ大將ト意見
を異ニ一事件起リヨビ
同地在留英國商人の嘆
願を容ル暫時出港を見
合せヨト同艦長に命令
アリナリト半品ヨリ電報
アリナリ

皇太后慶典挙行ノ準備ニハ
千二三百人の職人
工夫を使役して怡和園
体の各宮殿を修理中ナ
リ皇太后ニハ陰曆三月
三日同園に臨幸ヲ著

順天府尹護城御史ハ本年
各地ヨリ城内ニ入込
ムル流民多敷ニ一日ニ
十数人ナリト解ニ一日
ニ四百人の行倒ルル之
の救助の方法トシテ

部ヨリ基金を支出し授産
場を開設せんトを連
街奏請セリ

(天津發)

露國ハ教時間ニテ營口ニ
達し得ル地点ニ臺萬
の兵々三中隊の砲兵を
集中し遼河西砲台ニ五
吋と六吋砲を据置付ケ
テ夜兵ハ去リ十月に
日本軍の同所を攻撃セ
ザリ一撃の下に退却セ
ベシ
其際攻撃をうけんニハ
一撃の下に退却せざる
リ
今や十分の準備を爲し
テハ防禦ニ
事ヲ欠ラズトイヘリ

同外鉄道存
物送

新民屯の鐵道は務停止せしむる荷物ハ逆送せらる

營口近況

營口英國領事は在留民に英國政府ハ何れハ交戦國とも苦むじ(?)能ハざるに依り(意味不明ナル)其終(營口附近に軍艦を停むること能ハざる)昔公使の回答を居留民に通知せり居留民ハ不満を抱を居り同地の清人穀物商ハ掠奪を恐る偵物を山海關に送るもの多し三十日太沽洋行の汽船十一隻ハ營口ニ入り尚數隻の汽船ハ港外ニ在り俄國官吏ハ之れと運ぶる程様あり

清國ハ避難

長清銀行より清國ハ貨附金二百萬あり該商人等ハ督促を受けり丹々豆粉を輸出せしにあらざれば此金を又払ふ能はむとへり新民屯より関内ハ避難の清人頗る多し該地ハ人心恟々なり

鉄橋破壊

ハカキ浦(不明)の鉄橋は出水の爲多破壊せしが昨日既に修理せしむるなり

四月四日 (北京宛)

鹿傳霖の發議に成水、戸部銀行の設立、今回
愈々兩陛下の裁可を経て本店を天津に置き、戸
部郎中張允言氏總辦たることに内定せり。資本金
總額ハ四百萬兩にて一年を戸部より支出し一
半ハ民間より募集し或程度迄紙幣発行の權柄
之與ふる若那桐氏一派が最初より反對の態度
を取り居たり。事ハ戸部銀行の設立に向つて注
目せべき影響を與ふるや、知れぬ。

(天津發)

米國市俄古日々新聞社の僱船タクライタア会
社附屬船たるフリーアワン號は去二日牛莊に於

捕獲せし船中、日本人二名あり、捕虜とな
り同船ハ露國軍にて監視し居りりと

去三十日日本艦隊又復旅順を攻撃せしむ。此ハ
最近港口閉塞の効果を試験せん爲りなりと傳
ふる所のあり

營口の米國軍艦ハ昨日出港英艦ハ尙未定なり

砲台の修理ハ大に進行し此後露國軍艦出港せ
しむ。遼河に水雷敷設の準備ありと

敵と開外鉄道

新民鉄道は南江輸送しつ、ちつ高山海關に在りて情報と集め居り、我軍各謀ハ營口に向つて去り開外鉄道露國武官の往復頻繁とならん

四月五日 (北京宛)

奉天駐在米國總領事ケエシア、安東縣駐在同領事ケケイワドソンの兩氏は今夜米京しコンカ―公使と協議をなす筈にて多介兩氏とハ滿洲ニ赴任せむ當地ニ止まりならん

(天津宛)

自ラ遼河を遼

江方面の警戒

我軍ハ遼河口に支那船十隻を沈め、沿川一帯に二十個ハ水雷を敷設せり又遼陽にて邦人二名捕縛せしむるとの説あり

汽船奉天四川ヲ二隻昨日營口より三千五百の支那人を乗せ芝罘に向へり同船ハ我軍艇隊の老鉄山沖にあると見たりといへり遼河ハ流氷多く未だ水雷を敷設し居るを我軍ハ營口攻撃ハ最早開ルナランといふと信ぜらる

四月六日 (北京宛)

実業学舎と製
糖会社

載振貝子の矣誠、より、端郡王府の舊邸に実業
学舎を創設し、商務部の管轄に属せしむるに決
定せり。商務部は六十萬兩にして製糖会社を設立
し、官府總ての届書類契約書類辞令書等該会社
の製造用紙に非ざれば一切無効とせしむるの計畫
なりと聞く。

繁栄丸乗組員

繁栄丸の乗組員中支那人又ハ釋放せしむる
ル本邦人の容易に釋放せしむるべき模様なり。我
當局者此件に付苦慮し居らざるにハ、何らむ
れど事情判明せざる懸念未だ文涉に着手し
居らざる。石日牛庄米園領事の手を経て釋放

を請求すべし

四月七日 (天津後)

牛庄米園領事

無頼邦人の處分

牛庄駐在新任美領事ラウワーレン氏昨日着任
寧遠州附近を徘徊せし無頼の邦人男女五名地
方官より當領事館に護送したる。女二名ハ護
送せしむる男三名ハ東調の上退清處分となるべ
し。

アレキシーフ總督
視察

アレキシーフ總督ハ幕僚を率て三十一日奉天

敵兵遼陽ニ在リ

より旅順に至り陸海の防備を模索し長時間重
たし將校と面談し本月二日奉天に帰る
多敷の敵兵大石橋に輜濟しつゝありしより如
し而してワルソウ及びモスコウ地方より来し
る敵の新隊遣軍隊の既に遼陽ニ到着しをりし
のちよりがし

月下旅順にハ晨早夜國商人の滞留し居るより
一人ルなしといふて可なり

(北第5頁)

敵兵旅順を去り

戦時禁制品解禁

清國戦時輸出禁制品中材木ハ既に解禁せしむ
豆粉ハ不日解禁せしむべし隨て營口牛莊の豆
粉ハ今後至果し輸出せしむべしと想はる

(天津産)

連日督軍巡視

六日の營口電報にハ昨日同地に日軍進駐
の説あり人心恟々たりと又本日午後アレキ
シエフは砲臺附近の練兵場ニシ同地守備兵の
觀兵式を行ひ終りて遼陽撫城共池の防備を模
索せし由り
同地ハハ更ニ教門の大砲到着し援軍増加せし
遼河の水雷ハ今朝敷設し了り夜軍の準備ハ

既に完成せしむるなり
米國新聞通信船フーワアン乗組の邦人二名ハ
夜國軍衛に連水行平水汽船ハ解放せしむるなり
右邦人ハ水夫なり

馬玉崑より吉林奉天に派遣せし武官数名ハ電
報の往復を夜人に検査せしむる連絡を欠く為め
駐在せしむる居りしものなきを電報検査の緩や
みになりしに依り引揚ゆりたりと

四月八日 (天津發)

夜國艦隊ハ旅順を出で外海を遊弋せしむるハヤ
ン江南口港外に止まり港外三十哩の處ニ倫敦
タイムスの備艦海内號を追跡せしむ

四月九日 (北京發)

極東總督(附)府外交事務官ニ任せしむるハカ
ローは明日天津を發し奉天ニ向ふ筈なり

當地の美米兩公使館ニ達したる牛莊領事の報
告ニよれば遼河の封鎖ハ未だ少しも着手せし

これを謂ふ

四月十一日 (天津度)

バドロフ

バドロフ氏上海より来津せり

遼河口要塞と
營口防備

遼河口の一部分：水雷敷設せり同所にハ昨
今汽船三隻碇泊中なり此汽船出港せむ全体ニ
敷設せりしやハ遼河の軍隊を營口に増遣し同
地の防備を益々嚴にせり

(北京)

遼河の掠奪

遼河の軍需品の供給を東部蒙古に求り掠奪至
らざるやハ爲ニ我政府ハ蒙に忠告を與へたり
不蒙古の王公ハ微力ニし之を制止する能は
ざ外務部ハ当惑し居り

(天津度)

クロバトキン
營口に在

クロバトキン 將軍營口に來り砲台各地の防備
を巡視し今尚ハ滞在中なり

遼河は目下專心馬賊を召集し居り

遼河の馬賊を召集

四月十二日

(天津度)

前駐韓公使バブローが今朝營口に向き當地
と出発せり同人は奉天の民政長官に任せらる
べしとの説あり未だ確なり也

(北京宛)

前駐韓公使バブローが昨夜来京せり

ポスト新聞は果通信の電報なりと云ふ口
に電報に見えたる如く攘夷的傾向は當地
に於て更に之を認め也

營口方面より帰来せる耳情国人の談に據るに
曰く

クハバトキン將軍来着後別段に士氣を振奮し
たるを見む時ニ示威的演習を行ふとあり田
畠を蹂躪し居りニ韓に農民の苦情を増え
み軍紀は依然としし暴亂し兵士の分捕歇を
釋食の欠乏は既に掩ふべからざる所なり左
に清人より之を徴せんと言ふ其代價を
拂はざる可き之に應ずるは高給を授けて
く避難し去り其然らざるは高給を授けて
印度人を雇入れ之を以て門番とし兵士の乱暴
を防ぎ居り

地方一帯日清戦争當時に於ける徳を懐ひ一日
も早く日本軍の到らんことを翹望して止まら
ぬ重走卒に至るまで商人を増むの念頗る強
しアレキし一フは幾度か布告を發し「吾軍の爲に
に力かせよ現金を以て支給をばし小は相當の
代償にて徴発に應じよ」四年間保護の恩(一!)
を忘るゝ勿れ云々と稱えし更に領るものな

馬賊の處々に潜伏し悉に時機の至るを待たり
營口の如き白晝尙且馬賊の横行を見
同地の砲台晝夜工事を急を居水ふる未だ竣功
せぬ砲台附近に四隻のジャック放置あり之

を沈没せしめんことをの計畫ハ中止されたる
所如し

解氷以來去る八日まづに美朱檣等の商船都合
十七隻来港しをより先づ豆粒を日本に送りど
りの條件としし巨額の保證金を提出せむるべ
からざるを爲る商民中に苦情頗る多し
同地駐屯の露兵日本軍の上陸を恐るゝこと依
然とし改より露人の該にハ奉天以北の兵
みな南に集中せん其數は十萬と稱せし
此等の中には往々二一の間合はせの爲に哈
爾濱辺の商店員を徵募して武装せしむるもの
あり其不規律あること警くべし

尚ほ袁國は朝陽にあり馬將軍の兵及び永平に
あり袁德督の兵に對し其行動を偵察せしめん
に爲り二十名の士官を商人に扮して入込し
て居りしと云々

山海關に於て余の目撃せし所に十ヶ所、滿洲一帯
より開外鉄道に於て當地に引揚が來る避難民ハ
毎列車三百人に上り混雜を極め居りし遠河方
面ハ袁兵の取調嚴重なる爲り避難民の多くハ
迂回して新民屯鉄道に通をとり居りし馬玉崑
ハ開外避難の人民日一日より多く將來石洞の
變ありしを恐り豫後の善法を講究ありしを皆

當局に向て注意せり

知縣譚清臣ハ頗る洋務に通じ且つ効意を我ニ
寄せ袁國の爲り滿洲に向つて密輸出を企圖せ
る禁制品の取締には尤も其意を用ひ白菜、砂
糖、石油、酒類等同知事の手にし今日迄差押
へたるものは枚舉に遑ちらむ數日前にも鶏卵
二十箱と差押へあり

袁國の或武臣ハ四五週間前より同地の鐵道ホ
テんに止居り尋ら開内外の偵察と滿洲北京兩
地間の接續を計り居りし其他二名の袁國宣教
師と教名の又那人とハ袁探とて注目せし
つゝあり彼等ハ鉄道に於て開外を旅行する本邦

人の動作を向けて 特々注意を拂ひ居りし
余の同地滞在が故吉林將軍張巡氏の靈柩縣衙
門に到着したるが隨員の直話なりとて 譚知縣
より傳聞する所にこれが奉天營に兩地共何等
の異状なく交渉局の如き慶山平日と異なる所
なりし事も 彼地清國人間には 亞德督自殺の風
説を傳播しつゝありし

余の各方面より 探聞せる所と 錦州に特派せる
社員江漢逸史の爾し帰りたる消息にこれに今
日の處にして 關内外とも寧ろ鎮靜の方なり新
民屯滿幫子にハ時々夜兵の出没せると見れど
ハ大遼河以西には 夜兵の渡來せしもの 絶無なり

り

關内外に於ける支那兵の配置ハ前電の通り
に 馮軍袁軍共極めて 慎重の態度を拂ひ居り
局外中立嚴守の趣旨ハ 袁總督の訓示せる本旨
より 尤更に嚴格に遵守さるゝなり

遼東ハ漸次鳳凰城方面の自國兵を引揚げて大石
橋を中心にして 海城遼陽一帶に其兵力を集中
せるルもの如く 營に在りて 五十哩海城遼陽兩
地間に位置せる 鞍山店にハ 新に砲台の築造に
着手せり

昨日營口を發見して今朝山海關より 余と向別
車にて天津に赴任せり 英國總領事フロート

氏の直沽に高国の遼河に水雷を布設せし
事実なり。船の出入に支なく現に三隻
の商船と英國砲艦一隻の尚投錨し居り解氷
後商船の入港せしもの二十餘隻にし其の西
引の行けん居たり。高国の水雷布設の所今
後入港せし船の有無は不明なり。英國砲艦
の早晚出港するなり。其時日の未定なり。夜
艦のウーチは出港の模様なく今尚船渠に停
居りし
大石橋一帶に砲兵の集束しつゝあり。事
なり。確固たる兵教の知ると得む。營口の砲兵
は少数なり。一週日前にシキシキ。德督の營口

通過の際三千の砲兵市中に入来れり。直に退
去せし。營口に目下二十餘名の外國記者集り
居れど探訪難し。叩き居る者なく。殆ど何事
の得る所なきを云々

(天津誌)

營口の英船本日出港せり。砲艦は猶五六日
間出港せし能はざるべし。高国の營口にある汽
船十餘隻に強て出港を求りたり

四月十三日 (北京誌)

營口の砲兵

露兵根拠の状況

山海周来電に十日夜露兵は水先峯の砲臺より日本艦隊と誤認し砲臺より砲撃せり水先の燈火を振盪し信號したるも覺らぬ砲撃をると二十夜及び是と同時ニ支那旅船の番頭等營口の對岸より十舟にて歸るを見て日本兵の上陸と誤認し三百の露兵一齊射撃をせり支那人数人を殺し二名を負傷せしむなり

米國の安東諒中

米國領事アグイフドソンが本日上海に向て當地を出發せり追て暗機を見安東縣に赴任する者なる古寺人諒中

牛莊情報

牛莊の情報は據小の遼河河口の水雷の布設を終るを去る八日に二十四時砲七門及びカインナモ、ホイヤリ等を砲台に向て發射せりケハトヤンは去る六日一を來着練兵と閱見し二時間の後立ち去ると云ふ

露兵根拠の状況
終末

目下旅順に拘禁中なる露兵凡そ但日本人の運命ハ不明なり。我政府ハ駐清米國公使と通して目下露國政府に向つて其釋放を求む居り又市俄古ダイリニエリスの備人にして捕虜となりし二名カ日本人ニ付きて亦同様の手続

天下太平!

ニ及ひたり而して牛莊の米国領中ニルラ一
ハ一面民政長官カコフセ一氏に向ひ後國の爲
のニ捕虜ニせし小たる是等の人々ハ軍属ニあ
ラセ又同謀の類ニルあらざる事ニ注意し苛酷
の待遇を免れしめん事に勉めグロフセ一氏よ
りは其旨とア總督に轉電せし善なり

江蘇巡撫交代

軍械處は皇太后の御信任あり加へては果行史
の澤劾に念ひを江蘇巡撫恩壽を免職し四川
布政使陳璋を以て其後任を諒りしむ心を事に
内定せし

四月十四日

(北軍参)

右省分担の賠償金は従来一先上海通台ニ迫附
し通台より更に債権國ニ支払へべき事と成り
居たりし其利息ハ上海通台の收入に帰し居
たりし高務部ニ奏請の上其利息を轉用し外

賠償金詳利の
處

津兵費の二財源

却の經常費に充つべき元裁を徑り

各府より戸部に交附をば金額中より百万兩
を割りし津兵所の經常費に充つべき事に決定せ

り

袁潤智ハ赫徳氏の建議せる地租改正案と有体
各要樞ニ諮問せる意見なりといふ

故吉林將軍長順氏の電樞ハ準備の爲め数日間
城外の寺院ニ止り置きたるを昨日午後盛大な
る儀式にて城内の自邸ニ迎ひ入れたり

地租改正案と
袁潤智

故吉林將軍の樞

四月十五日 (北京書)

營口歸營談

營口より到着せる外人の直話に據るに營口の
露兵ハ牛莊屯にあつたものと合又二千餘りして
解氷以來日本軍の束縛を恐るゝと長く昼
夜警戒を怠らば營口蓋平間の海岸にハ二千前
後の露兵配置せし日本軍の上陸を警戒せり
又營口砲台にハ二十二門の大砲を据ゑ付けあ
り

大石橋附近の露兵ハ凡そ一萬にして其過すハ哈
爾濱附近に徴集したる新兵あり十七八あり

四十歳位のルのル混同去毎日二回在訓練一稍
熟を心ば他の方向に送り居り
遼陽の兵營にハ天然痘流行一毎日二三百人の
感染者あり
旅順と露新周に軍用電話線を開設一六ヶ所の
交換所あり
クハバトキン物軍ハ遼陽ニ帰ル

吉林將軍の電枢と護送一表少ハ道台某の直轄
ニ依ルハ防軍死去の際露帝ニコラスの斥名ニ
て花環一對金三千弗壽贈ルハ城を出ガるとも
ハ城内の露兵悉皆と俄仗兵と一ハ城外迄護送

せしめたり 旅順の吉林將軍署理に任命されたる
ハ露人の希望に出でたる事疑ふべくしりら
ハ城内ハ露兵の身命嚴重ニ一ハ支那官吏と露
ども護照を有せざるものハ出入を許されぬ吉
林駐在の露商等ハ其強し兵籍ニ編入^{させ}ルハ
事を以て假鞆髪を付け支那服を纏ハ逃走を企
つるもの多し戦地に向つて派遣さるハ露兵等
ハ意氣全く沮喪して戦を忌み 状實ニ想像の
外ニ在リ云々

露國ハ増祺將軍ニ送リ將軍部下の馬隊五百の
借入を求め將軍ハ回答ニ窮リ居ル

五路兵天然痘候

奉天より帰水より又那人の談に依順より三百五十の病兵を乗せ去る汽車奉天を通過し哈爾濱に向ひたり此外毎日二三十人宛送らるるの總て天然痘患者あり大石橋附近の山に又那人の金子と禁じ居り何らの設備を有し居り

天津督と奉天將軍

(天津赴)

アレキし一ノ總督ハ奉天將軍ニ同地ハ又那守備兵と撤去せん事を要求したり將軍ハ之を拒みアレキし一ノ總督を訪はんとせしに派兵之

と拒みし城門と出さしむ將軍ハ外務部其事と電書せり

四月十六日 (北京度)

北京と距る一千餘里なる天山北路蒙古にて喀爾喀王と云へるは本年二十四歳の少年なり其賢明の譽高くカラクン王と伯仲の間在り風蒙古種族の衰退と衰き族勢挽回を以て自任し居たる不今回急に政未漫遊と思ふ蒙古が清朝の藩屏として其職責を尽さんと云ふは廣く海外諸國の事物を視察し其知見を廣く在る

蒙古の外交計畫

張翼を起さん

の要ありと十箇條の要を説き出遊許可を奏
請せし然れども清廷が先例なきとの故を以て
一昨年カラタン王恒外出遊の企を沮み公然と
恒外出遊許可を與へざりしに思ふに其年一
決裁を得べきや否や未定なり

張翼を起さん

清廷の榮壽の取做により張翼を起して再び重
要の地位に就けしむるなりと云ふ
山海周より電報により小公營に三度迄砲
一市街の高兵を海岸に配置し近來營口の

兵力不足の爲め所謂風声鶴唳にて頗る恐怖の
模様あり又去る十一日夜過りて銃殺す小
たの支那人の賠償として夜圍領事より五百
回宛を與へて事所みとせし營に於て遼陽鳳
凰城間ハ六十清里毎に三百乃至五百の夜兵を
配置し百二十清里毎に兵站所を設置し居り

四月十七日 (北京發)

夜圍砲艇シガイワチは昨日船渠と出で牛莊港
と去りしとの報あり

夜圍砲艇シガイワチは昨日船渠と出で牛莊港と去りしとの報あり

岑春煊氏ハ目下委實を河南湖北の両省に派し
て馬、歩兵八營を募集せしむる中、岑氏は兵を
関内ニ乱入せしむる可きとあらば直下軍隊を率
て北上せしむる意見ニて通商胡某と京中に面し
時局の成行を偵察せしむる居り

蒙古經務司長官昭毅ハ我國の敗兵を蒙古諸部
ニ輸入せん事を慮り馬隊を張家口西安朔平の
三所より要路々々に配置し警備の手配し、勉
め居り

獨逸艦隊司令長官フロトハ氏昨日ムンム公使

と共に乾清宮にて兩陛下に謁見せり

膠州灣膠濟鐵路に曰く獨逸は青島濟南府鐵道
の經營を以て計畫せり濰縣芝罘間の鐵道豫定通
路の測量中ニて此線路は既に竣工せし
むるを意向あり濟南天津間の豫定線路も本月
二日を以て兩地点より本測量に着手せり

我國公使レツサル如ハ一週日前外務部ニ向つ
て直隸の支那兵訓練に日本士官を聘請せしむ
る議を請り万一外國士官僱用ハ必要ある場合
ニハ我國士官を聘請せしむる契約我國兩國間

西宮行幸

露國の兵炭買収

日本人捕縛情況

皇朝輸出解禁事情

成立し居る由に提唱し外務部、更に此旨を
 袁總督に轉照したるに袁總督、日本士官の手
 に依り互隷の支那兵を訓練せりとの事、事實
 無根なりと力回答を與へしを旨覆稟に及
 び
 露國が此際突然斯う通牒に及ぶ事ハ之に
 して清國中立違反の口實とし露清開戦の機会
 に日本士官の支那軍団を訓練せんが爲りの
 牽制的警告にハ非ざると思はる

四月十八日 (北原氏)

西宮ハ今朝願和園に中幸ありせしんたり

露國新民屯溝幫子附近に徴發的ニ土民より
兵炭を買収しつゝあり

遼陽に二名の愛媛日本人捕縛せしめたりと
の説あり

清國政府が皇朝を以て戦時禁制品と爲したる
ことに因り内田公使の清國政府に抗議を容れ
たりは既電の如くならず外務部も亦その抗議
を以て至きと駐露公使胡惟德も之を以て露國

外務省に交渉せしめ日本に之を輸出せし場合
は之を以て馬糧に供用せしむるに
供用せしむるに保証を行はしむる可
し
田公使不度親王を訪ひ催促を試みたるに對し
本日右辭禁の旨外務部より我公使館に通知
し来りたり
是又ハ上海等にありては之を不爲り
本に輸送せしむることと爲すべし

四月二十日 (北京電)

牛莊
遼東
遼河以西
撤退

牛莊遼東國民政府ハ去る十五日一片の布告を出
して各團汽船ハ港口を去る一海里と五海里と
の間ニ隔り碇泊せしむる然らば一布設水
雷ニ觸りし其責を負はせ又貨物の積卸しに
起間之を行不可らむと通達せり

遼東ハ遼河以西より自國兵を撤退し清國の中
立を尊敬せしむる意を示し第一持來ニ於て我公
軍の該方面より上陸せしむる妨ぐる計畫ありと
の說行はし

四月十九日 (天津電)

敵の遼陽軍

キリル大公答

和了満州馬賊

敵艦シウーケ

敵軍の多くは遼陽に退却集中せし

キリル大公旅順沖にて負傷後奉天に送るも療養中なるを一時発熱せし其後の経過は良好なり

全州大孤山方面に馬賊蜂起し敵兵を悩まし居たり

北支の露國砲艦ハ遼河に歩下十六日石炭を積込み

哈爾濱の情勢

哈爾濱よりハ爾濱にハルビン同地に目下歩兵八百騎兵百餘駐屯せし敵兵ハ遼陽及び鴨綠江方面に集中せし旅順より死傷病兵汽車より同地に送るもハルビンの列車にて五十台あり多数の軍醫看護婦附添は到着せし同地にハ朝鮮人五名日本人四名拘禁せしハルビンに敵兵の掠奪甚多言語に絶え

四月二十日 (北京發)

駐龍支那人

山北関よりハルビンに來電ハハルビン旅順遼陽及び其他

各地より營口に避難し来りし又那人百餘名、
昨夕當地に到着せり袁溥智ハ避難民救助委員
を派遣し困難せしむるを以て一週間一回兵費
債を以て送還せしむるを以て此外に自費を以て未
だ避難民昨今非常ニ増加せしむる云々

蔣式^理ハ廣親王が多額の收賄金と滙豐銀行
に預け置く由を奏議したるを以て廣傳霖氏に
余は帳簿を照して事實の有無を調査せしめん
としたるも該銀行の店規ハ帳簿の閲覧を許さ
ざらば同行ハ廣親王が該銀行に出入せし事な
き旨を證言したるに依り蔣式^理ハ根據なき彈

劾を隘りにせるものとして 譴責を蒙りたり

李廷儀氏の奏請中より貴州常備軍召集の件
に允准を與へられたり

四月二十一日 (北京発)

吉林奉天兩將軍及び上海通台等ハ中央政府に
向つて豫備軍を近來種々たる口実を設けて我政
府を迫害せんとするは必竟我をして局外中立
を放棄せしむんとするの真意あるを以て
の電禀を及覆せしむるに清廷の意見は稍強硬と

なり若し長国にして再び再び清廷を殺す如きは
不始も行存ありん此上の屈伏を甘受せむ
決心にて数日前袁總督に密に重大なる訓電を
共へ馬玉崑に中央政府より何等かの訓示を
下すべしは慎重の態度を取り軽々しく響を聞く
勿小との意味として同様に訓電を渡りたりと傳
へらる

袁總督が一昨日軍機處に密に五千餘名の長電
を送り来りたるは恐らくは此件に就ての建議
なるべし清廷が此決心に出びたるは一に八朝
野の主戦論者も漸次其勢力を増加し来れり
ル由るべし我海軍の連戦連勝にて勝敗

の機密定まりしを認識せしに由ること勿論な
り

四月二十二日 (北系英)

佛國の雲南より廣西を経て廣州迄に達する鉄
道の利権を得ん不爲る旨自裁は漢口より洞庭
湖附近に至る蘆漢鉄道又豫敷設の許可を受け
ん不爲る隱密に運動せしる成功に至らば

アレキニ一フ總督辭職説ロイヤル電報にて傳
はり同總督の無責任と攻撃する外国人等より

佛國の鉄道建設
運轉

ア總督の無責任

滿洲各地より之情報に依りハ本國より新に派遣せし蒙兵ハ世評の如く多うむ三萬人以内なり可く西比利亞沿州及ハ滿洲を合せて總計二十萬を起すべし

アハハ蒙古トルコト五の出征奏請中蒙政改革の意見十二ヶ条を列挙せしこと前電の如く其要を摘記せん：

(一) 蒙古各部落に大中小學堂を設けし教育を普及せし事

(二) 廿歳以上四十歳以下の壯丁を兵役に編入

一 常備軍を編成せし事

(三) 牧畜開墾鑛山通商等々獎勵し工藝等々分設し之毛織物と製革事業を起し蒙古の富源開發に從事せし事

(四) 各部落に漢蒙兩文を用ひし新聞紙を發行し民智を開発し通商を事

(五) 各部落に參謀兼顧問として二名の漢人を招聘せし事

(六) 團長の任命は従来理藩院の奏請に依りしを改りし各部落の公選に附せし事

(七) 喇嘛僧者願者の數に制限を加ふ事なり

カールス嬢が今年今年の苦心と費し聖詔易博覧
会出品の目的は此畫を上かたし西太后等身の
御書ハ此程完成し教日前に外務部にて各園公
使館員及び各大臣等へ拜觀を許す小なり西太
后ハ其後慶親王王文韶等に向はせし小苦力
を以て印影を運搬したる不敬を叱責せら
れたるや印影運搬の爲り特に外務部より
崇文門迄一哩四分の一に是らざる間に鉄道軌
道を敷設せし運搬の際ハ附近の一帯に撒砂
を爲し儀仗兵をも附せらるべく其費用のみ
一萬兩を要するも由りし昨今内外人の一語

極となり各々

御史蔣式瑄ハ昨冬勸学大臣榮慶を弾劾せし爲
り大學堂の教授を罷りしハ今回又慶親王の怒
りニ觸れし御史の官職を削るを以て言官と
して況々譯々の議を敢てし毫も顯威を忌憚せ
ざる彼の勇氣と硬骨とハ現今の御史中亦一流
の人物とし何人ハ其とせざるはなしく此頃の
懲戒的免官の如き識者ハ之を毫とせず御史間
ニハ之を爲る一種の反對を惹起し機會を待た
し一層激烈なる澤劾上奏を附呈し當局の非曲
を評くべしとの説頻りなり

朝陽よりぬ報道に依りて目下該地に駐劄せし
馬玉崑の兵ハ安騎砲を合せし十三營あり馬提
督は營に附近ニて日夜の開戦を待ち農圃敗兵
の乱入を防止せんが爲り更に本營を錦州近進
むるに苦なり

(天津夜)

溝幫子と距り八里の大營子に農圃兵百名佐官
に引率せしむる來り田庄台の北方五里ハカ
ル屯にル歩兵三百駐屯し南は増加の模標あり
波平は牛馬糧食を徵發せしり代價を払はむ

四月二十三日

(天津夜)

吉林附近に馬賊の一團待ちり此内ニハ曾て奉
天府の官吏たりしものニて農圃の爲りニ免官
す小恨骨髓ニ徹せしものもあり徐ニ或時機を
待ちんとせしむるや如し一概ニ烏合の勢なり
とて侮り難きものあり要するに夜軍に取
て後顧の憂たす可し

遼陽附近の敵兵ハ手當り攻め荒らし廻りし秣
を徵發したる爲り地方人民ハ意外の困難を感
ず居り右秣ハ遼陽海城の兩地に集り同地より

リ各地へ分送する模様なり且つ右の處方の用
 に充分な支那のるべし
 營口の外人及び支那人の支那の營内に避難
 せし彼等は凡そ日本軍營口を占領せば直に帰
 還せよと旨公言し居り
 營口の外國新聞記者二十人以上居り同
 地より先へハ容易に進み難を披ちり
 商人ハ去る二十日迄の各新聞通信員に對し營
 口より奉天に行く事を許可せり
 紐育コリアス、ウヰルクリー 二名
 倫敦モーニング、ホスト 一名

巴里及紐育ヘルルド 一名
 巴里ル、タン 一名
 ル、ジエーナル（伊太利新聞）一名（不明の姓名）
 米國アズソンエトラッド、アレス 一名
 又從軍を拒絶せし小たる新聞通信員ハ尤々如
 倫敦タイムズ
 倫敦テレー、シレケラフ
 倫敦テレー、メー
 紐育ウオールド
 紐育ジョーナル
 乗港エキカミナー

(北第拾)

上海に於て清國官民有志者の發起したる赤十字社設立の議ハ袁世凱、魏光燾氏等の賛成を得中央政府亦之に同意せり依りて目下赤十字本部ベルンに向け加入の件に付て交渉中なり之に對し日露兩國公使より反對を申込みたりとの世評ハ全く訛傳に似し唯右病院を文戦地に設置せしむる戦事行動に妨害ありとの注意を加へたるに止まり

四月二十五日

(北第拾)

上海通台管理の賠償金及關稅の利息を商務部の經常費に轉用せしむるをといへる商務部の奏請ハ裁許を共へしむるに利殖の法宜しきを得は前記二項のみにて一年凡そ五十萬兩を剩し得る餘算なり

四月二十六日

(天津宛)

水雷漂流の説ありて當地各汽船會社は航海を中止せむるべしと號し豫定の通商大詰を出発せしむるに郵船會社は北清航路を中止せんとす

議ありし、當地支店及び總領事、其不可を
打愛せり

デーリー、ニウス通信船フーアン號にて捕へ
し、日本人二名は營口駐在米國領事の尽力
に依り明日解放せらるべし

復國營口知事兼海關代理クロツセーギハ、
キニール總督の命に依り、營口河北停車場及び
附近村落に戒嚴令を布き、橋左の三ヶ條を添付
せり

一、營口河北停車場より右所に發せし電報は之

を検査せし一切の私電は本官の検査せしむるに取
扱はる軍務各電はヘルミシ大佐又はラボラ
ースキー中佐の検査を要し、暗號電報は受付け
を總て電報、以上各官の認めなければ電報局
にて受付くると得む若し名を公電に依り私電
を取扱ふ事せらば長官其責を受くべし

二、營口河北停車場往來の乗客貨物の皆検査を
派遣検査官は鉄通事務即ち運輸上及び商業上
の事に干渉せしを得む

三、本官は海關稅務司と交渉の上海關より一名
の吏員を鉄通に派し、検査官の命を奉じ電報及
乗客貨物の検査を司らむ

王鳳督と増援軍

以上各節、四月二十二日より施行す

アレキレ一ノ達陽より増援將軍：緊急の文
添事件ありとて来訪を求むに同將軍、職責
上出城する能はざる故李聘三を正使とし左某
を副使とし派遣せしに彼、拒んで面会せむ
將軍自身：来らんを要請せし

鴨緑江岸に派遣の義國士官、安東知縣に十日
以内、城内居民の立退きを請求せしに對し同
知縣、高麗門を暫らく移築せんと云ふ

義國士官の要求

敵の狼狽

遼陽より牛筋屯まで鉄道沿路に義軍は枯草を
積みたる軽便の狼火を三丘清里毎に設けしに
数日前營口砲台より発砲せし時牛筋屯にて狼火
臺二點火せし漸次相傳へて遼陽に達し大
騒動を惹起せし

遼河沿岸の敵の手控

遼河沿岸、毎日毎夜歩哨をせし警戒、河内
あり船船は夜間點火を許さば若し達せし
銃殺せしと嚴達せし

(北京電)

義國公使、再三交渉の末漸く代理者としん廢

敵の請部の外交

親王に外部、会见せし駐日公使より外務部
宛電文寫を承し清國政府が日本と聯盟の意思
ある由電文中の字句を引照して其故を詰問に
及ばずして慶親王の何處より之を入手せしむ
やと反問し外務部の一員より得たりとすこと
に慶親王の微笑しなごし 弊政府にちてこの決
して此事を思ふに賤吏某が射利の目的にて
故らに斯る虚電を捏造し賢明なる貴公使を欺
罔せしむのなるべし大臣ハ謝罪の爲め即時に
彼等と斬首せしむると言ひしを夜公使館員ハ反
て彼の罪なきを辯明し倉皇辭し去りたれど慶
邸は直に疑ひある該官吏を免黜せしむと

獨逸の專横

獨逸ハ天津瀝南府間の鉄道敷設に就し山東省
巡撫周馥が謀入ると周巡撫は袁總督と文渉
の上何分の回答に及ぶべしと答へしに独逸は
專断に二名の技師を派遣して該線路の測量
に着手せしむるの由にて前記両名の技師と同
行の山東文渉局吏員余某といふもの委細の顛
末を袁世凱が内報せしむるに袁氏は甚しく
獨逸の專横を憤り断然獨逸の請願を拒絶せし
むる決心なりと聞く

四月二十七日 (北京炎)

機敏を哀悼
準備

袁世凱弑、日清戦争終局と同時に政敵の或地に列国会議開催さるべく此時君一我國の委員ニ一し其間ニ参加する者ありんば我國ハ非常の不利を蒙るべし心分りて豫め在外各使臣に電請し此意を以て竊に各国外政府ニ告知し將來果し列国会議を開く場合には我國より必し委員を列席せしめ以て遺憾なきを期すべし旨奏上せし

王詔の奇禍

王詔ハ一昨年来滿地にて私立学校を開設し政局の開展を待ち居たり不意に二十四日那桐と

会見を約し外務部ニ出頭せし其終刑部の獄ニ投せし小康有爲の一味として終身禁錮の宣告を受けたり陳蓋の處刑ニて其膽を冷し居たり當時の維新党等ハ此捕拿によりて孰も自己の身命を危み戦々競々の有様なり且つ彼等は政府が表面に於て禁錮を宣告しなす私に之を死地に隔りしにハあらばやと懸念し居り今回王詔の捕拿も陳蓋と同しく或る要路の大官が自己の功名を計らんを慮り皇太后ニ伺つて捕拿の得策なることを面奏せしに依りしと

四月二十八日 (北京共)

遼河一帶敵情偵察の爲に十八日山海関を發し
左に特派支那人の復命を左の如し
遼河附近の防備は頗る嚴にして城門を距る五
清軍乃至十五清軍の周圍は目下切りに砲臺
を建築し其數十二個ありし未だ大砲を据付く
るに至らば城内に常駐の兵なく城外に散
在し居るもの約三百ありし停車場は二コ
あり兵及此其他の歩兵五六百許り駐屯し停
車場の北方一帶に亘るのパンペラ作りは兵舎
あり其内は歩兵と騎兵とを令して約千名程駐屯

し居り又同所に野砲二十門ありしを窺見せし
門外太子河の東岸に東門といはる小城廓あり
其内に約五十人の兵ありしを教へ西伯利
亞地方にて募集せる新兵と費しく訓練未熟に
老弱混じり居りし支那人等蒙古人と稱し居る
遼陽に兵站部ありし糧食を貯へ居りし其倉
庫は鳳凰城に輸送しつゝ倉庫を以て堆積し居
るもの極りし少量なりしを奉天の公義車
廠と稱し馬車屋の支店にして引受け砲車三百台
を以て輸送し馬車賃は一日五留一車を積載量
は約二千斤にして五六頭の馬を以て之を曳けり

目下額：輸送一ツ、女子良澤榮 考 考粉
等に一ツ毎日三十台乃至五十台の馬車にて輸
送一居少く遼陽鳳凰城間の距離三百六十餘清
里に一ツ其間の輸送ニ五日を要す
鳳凰城の西方六十清里なる分水嶺：兵站部を
設け遼陽より輸送一来るルを總て同所に貯
蓄一ツ、あり又輸送の馬車欠乏せしを以て之
を補ふ爲め百頭の驢馬を買入小輸送を試みん
ると目下盛に荷造り中なり同地方の牛馬は既
に徴度一尽くし其教育のうを願ふ用却一居
る様様ニて毎日僅に牛七八頭を屠り居少く
遼陽の南方十清里の處に二個の山あり周山と

ソシ鉄道其中間を過く其の二個の山上に砲
臺と築きし大砲四五門を據え付け居たと見え
たり
遼陽ニて日本人二名捕縛さるるとの説あり
しし何らの誤聞なり又支那人二名同謀の嫌疑
ニて捕へられしに僅かの賄賂に直に放免
せられたり
遼陽附近の農民は避難者多きたり附近二十清
里に未だ麥と植付けたりが誠：荒蕪たり有様
なり城内の支那人は尙ほ多少の糧食を有し糧
店：も雜穀一萬石程はあり一内七分は唐蜀
黍なり

鞍山店にハ東方の山上に堅固なる砲台を築き居ルに砲教ハ教ふるを得たりとも夜兵の同地にありしもの約五百に二附近のアンペラ葺と兵舎の内ニあり

海城停車場近傍ニ一、二百個の洋藥箱と五千石許りの麥と堆く積み居るを目標せり停車場ニ四門の大砲あり其附近に五六百の夜兵あり其他海城ニありしもの三千餘民家を台領して兵舎とせり居りし

大石橋停車場の山上同くも新に砲台を建築しつ、これと未だ大砲を据付け居らば山の中腹に教ふ兵舎を設け約五千人の夜兵を收容し居

れど内地の夜兵ハ日々移動ありし其数一定せぬ

四月二十九日 (北系費)

營口の市内を距り五里海岸の砲台に至り近河岸ニ沿ひ五清里毎に砲壘を築き居り其数五六ヶ所あり砲台より東南蓋平に至り海岸にも同様砲壘を築きつ、これと其教ハ不明なり東清鉄道に於て支那人の乗車を許さば、これ支那通譯に賄賂を共せしむる竊に乗車をせしを得營口より滿洲内地に入るにハ格別の困難なり

ハ軍事的秘密の漏洩と怖ハ南関の支那人に對して種々なる妨害を共へつ、チハ派遣員が偶然同車せし奉天避難者の談に「ハ奉天にハ目下三萬餘の兵あり、露軍の主力ハ全く奉天附近に集中せん居るハ、此ハ彼等ハ不潔なる衣服を纏ひ訓練未熟ニ一見烏合の新募兵なり」と知るべく且つ自軍の敗亡を傳聞して非常ニ恐怖の念を抱き居り、露軍の精銳ハ依然鳳凰城附近に集中し居る様なり。

阿什喀より来ルルハ、談に曰く同地にハ一

ヶ月前迄多数の兵あり、其後悉く南下し目下極りし少數の兵を駐り居り、哈爾濱の停車場附近ニ於ける總ての兵營にハ胸壁を築きたり。

緩城子の英國教会堂ハ宣教師の引揚げと同時に總ての建物と兵舎とを、アレキシーフ總督ハ滿州各地ニ告示し露兵の屠制的徴収を禁じ、之の爲る物品買入等には比較的正確の代價を支拂ふ様になり。

四月三十日

(北京英)

夜公使館：こゝ有力な了宦官教名も買収し交番：乙使館に來り皇太后皇上兩陛下の日々の所行動を細大となく報告せしつゝあり

湖北巡撫端方氏は官職を辞し自費にて海外漫遊と計畫中なり

安東縣より歸來せし清国人の談：依小該方面一体の義兵は約四萬：乙其外マタリ口ツフ中佐の率ある張占元部下の馬賊千五百あり日本軍至るの日ハ義兵一敗地ニ墜り可し其理由ハ義兵ハ戦意なく恟々として戦争を望み上

長官と兵士との間常に不和にて衣食ヲ準備十分ならぬ兵士中間に餓死を叫ぶあり且つ兵士は一様ならざるの弊あり又中に罪人の偏入せり或は被服武器欠乏の上同一ならぬ操練法も適々あり上長官ハ武勇に慢り兵士ハ配置に注意せぬ其他兵士の掠奪強姦等を更ニ禁せざれば地方人民の怨恨非常なりと云ふ

金州丸沈沈の報ニ接し滿地の清国守備隊ハ徹夜の良を聞きたり

北京天津電報集

營口大連の防備

五月二日 (北京元)

營口砲台と牛家屯との間ニ鉄道と敷設し、
又又知ルニ市街西北の丘上ニハ新ニ砲台
を建築中ニし、棧橋の西側ニハ地雷火を埋設
せり

(天津元)

當地の或る信を聞き、遼一たる電報に據る
ば、一昨朝露兵約三千遼陽より南下し、来りたる
は其大石橋を看らし、頃鴨綠江の敗報に接し、直

遼陽方面の兵

に引返せりと云へり

五月三日 (北字表)

江蘇巡撫恩壽片史に讒奏する張之洞之の査辦
の内余を受けし張總督の具実を調査する
詹の機噐局建築の位置核分を託して燕湖に出
張せり

王照の投獄：執しハ京津間の各新聞筆士揃へ
て彼を康有為等の党共なりしことなく一個の
改革意見を懐抱せる愛国者なるを論稱し清國

江蘇巡撫彈劾せ
り

王照就捕録聞

政府が昨夜沈善を撲殺せる所を如何に列國の
軽侮と嘲笑を招きしやを引証し當局者の反
省を促し中にハ之を以て單に政府が改革の真
意なきを表明するのみならず換言する
ハ排外的精神の表顯に外ならむとまじ極論を
するも亦し當局者も稍々其意を悟るるなり
如く皇太后の万寿節に際し或ハ特赦の恩典下
にありんとの説あり王照が投獄に至るもまじ
の因由に就てハ裏面に種々の事情あるらしむ
も自首に出でしと文に確し外務部の代表を
求めたる陳奏書にハ明かに自首の理由を述べ
其一节に罪を得たる兒女の號泣して哀と父母

に乞ふ隣人の答を願はざると同じく断つて外人の干渉を願はむとの意思を明白に皇太后皇上の聖恩如何に信頼するのみといへば投獄中の王照の親戚故苗の差入物なく普通の罪囚と相仕して粗衣粗食備したる艱苦を嘗みつゝ、之れは特赦の恩典に浴する望みありと云ふる其時迄健康を維持し得べき中否やを気遣ひ居らるゝの多し

哈爾濱帰答談に曰く花園は同地附近に徴發せし分量の糧食を餉給所の後方に貯藏しつゝ、市街の北方に土壁を築き其下に堀を穿ち

市街の南方二十五請里の處に此等く堀を穿ちつゝ、之れを花園の一層堅固なる防禦工事と施し同地を以て第三防禦地となしむる意思明らかなり

同地にてハ諸物價非常ニ騰貴セリ

五月四日 (北京書)

旅順帰答談に曰く黄金山砲台は甚大の損害を受け西麓の砲台の如き殆ど其用を失はせし虎尾の砲台も破損多く目下支那工吏を督して盛修中なり東航渠に目下三隻の軍艦を修

理中なり日本軍艦より度せし砲澤ハ大澤湖に
落ちし其少くハ高田ハ拿州城の西北門三方を防
ご城内の居留民等ハ總て南門より出入せり

五月三日 (北京書)

高田ハ遼河以西より糧食運搬の爲り同河上流
の三箇所に仮橋を架設しきり

高田ハ滿洲各地ニ於ては從來ハ掠奪主義を改
め懷柔策と稱し帰順の馬賊ニハ一定の給料と
與へ土民より徴収の物品ニハ相當の代價を交

松江の實價ありル一ブル紙幣を渡せり喜ぶ
乙商人の用を爲せルものなり

牛品よりハ近信に曰く遼河河口に水雷を布設
しきり各商船ハ危険を畏れ入港せし輸出入
貨物の堆積し輸入品ハ欠乏し高賣ハ皆無り
なり

高田ハ干渉又ハ調停拒絶の宣言ハ當地ニても
高田公使より外務省に傳達せし不果高田外交
官ハ諒りて曰く今や教度の海戦ありし陸戦
ハ初期に属し各商とも進みて戦争中止の運轉

と考へるは、力なく英國亦女し、戦争と止むる意
なきに露國亦突然此宣言となす、凡空砲に似し
其必要なきを如く一見奇怪なるも、其真相、露
國ハ海戦に名譽を殞し陸にもし勝算なきは、小ハ
今ハ内には詰末を看けて世評を避けん、否否表
面ハ拒絶を言ひなり、裏面にハ調停を頼み
自らハ飽く迄も拒絶を揚言せしむるなりと

五月四日 (天津宛)

関外より归来したる某外國人の笑見談に依り
ハ營口の露國軍隊にしてハ、近日來頻ニ豆及豆粒

と徴發若くは買入小銃程多量ニ保存し居り、
故多分馬匹の食料ニ充せらるゝと思ひ、露國
ハ積りこころハ万一場合露國軍ハ機械車
ニ用ふる石炭の代用として燃料ニ用ふる考ら
り、既に其試験を行ひ、既に角用を看せら
るゝ、ゆゑといふ、窮餘ハ窮業、眞面目ハ沙汰と
は見之が目下同地方の滑稽談となり、居り、又
同地方の露兵ハ陸軍ハ陸軍と同トく形勢日に
非なる考、士氣大に沮喪し、何とぞ戦争と逃れ
んルのと企て支那の膏藥ハトと称せり、下痢
藥服用ハ態と下痢して、身布を衰弱させ入院
せしむるの續々として生ト中ニハ分量を知らむ

多量に之を服用して死亡したるもの一昨日
は二十八九名あり之が多く高麗軍隊にてハ布
告を出して此何なる種類を問はば榮一切之
を兵に賣渡すを禁じ居る之を犯すものは嚴
罰に所在る肯嚴達し附近到る處に掲示あり
又同地にハ家の外に燈火を付けると禁じ室
内にてハ外へ洩すものは之を點火するを許
さざら

(北京発)

去月末鉄嶺附近に於て鉄道二箇所馬賊に爲り
破壊せしむる

天津の義園領事ハ日本の黒木大豹の公報に虚
偽なりとの回章を出し各外人の嗤笑を買へり

山本写真師ハ宮中の撮影に依り昨日萬壽山に
乙皇太后を撮影したり

五月五日 (北京発)

奉天に於て義軍ハ増祺將軍部下兵士の武器を
悉く取上げたり

討伐義民團の蜂起

奉天及び遼陽附近に於て多年の怨恨を報ひし
多の義兵討伐の義民團處々蜂起し民心恟々
たり

義兵の南進

義兵の蓋平方面に向ひ續々前進する奉天より
通報あり

五月六日 (北京電)

パウロフが奉天

奉天にありしパウロフがハシワサー公使に打
合はるゝことあり昨夜未定なり

清國軍の集中

(天津電)

馬玉崑將軍の率ふる軍隊一萬二千目下永平府
に集中しつゝあり

(北京電)

甘肅境外の蒙古に馬賊千餘人蜂起し滿州に向
つて南下しつゝあり彼等ハ銳利なる武器を有
し居り

五月八日 (北京電)

去る五日奉天附近に於て馬賊ハ鐵道を破壊し

塘沽將軍と中
立
達反

ハウラ来京の
内情

霞院と切新あり右に付も壇祺將軍ハアレキニ
一ノ總督の命を奉りて鉄道保護の爲に沿道に
兵を配置したり内田公使ハ之を以て中々違及
の所爲なりとて昨日外務部ニ抗議を爲せり

ハウラハフの来京ハ世人の注目を惹きしる其眞
相ハ奉天ニ在りし更に快腕を揮ふを得むしフ
サレ公使病氣ニし身体ハ自由を失ひ居ルハ代
理の内命をアレキニ一ノ總督より受け様子を
見んとし来京し去るルのなりしレフサレ公使
ハ近來健康苗に復し明日催さるべし萬壽山の
所宴にハ列席せしと力み居ルハハウラにハ

大に失望の體なり

楊逸皇帝の第三皇子アガルベルト親王本日着
京したり

楊逸皇帝の来京

五月九日 (北京宛)

各国公使の来京

本日各国公使、公使館員等を頤和園に召し上
宴を賜はりたり高国公使レフサレハ列席し
たりと噂程にハ衰へ居らざらん只禮段を
を昇りしとハ人手を借し居たり尚且明日ハ
各公使夫人等も召宴さるる事なり

高田、去る七日營口砲台の武装を解き其兵を
撤去せり營口市街の夜兵も不日遼陽に引揚り
若くは河口に沈没の水雷は目下其まゝに
倉に居り

五月十日 (北京書)

前駐韓公使ハッロフが當地を出發せり
分西比利亞鉄道に依り帰国せり
山海關より情報に據り去る七日より八日

にリテ營口方面ニ日本艦隊引續き砲撃中なり
との噂あり營口の士氣沮喪甚しく到底之を
維持せしむと能はざると認めたり
新に築造したる砲台より砲を取卸し此等ハ皆大石橋
に運搬せられたるとの説あり又第二軍善蘭店の
鉄道を破壊したる所より列車も亦從つて押へら
れ其内にアレキシーフ總督も居たりとの風
評同地ニ高しと云ふ

五月十一日 (北京書)

去大日旅順を度したる東清鉄道乗組員の直話

汽車の金州を過ぐ、迨此何寺の異状なく、
兵隊の同地に滞在し居たり。普蘭店に至り、初
りて日本軍の台領し居るを知り、喫驚せられた。同
地にて日本軍より下車と命せられた。夫れより徒
歩にて瓦房店に至り、途中鉄橋一ヶ所見事に
に破壊せられた。附近の鉄道三哩も同様に破壊さ
れ居たり。瓦房店の台領に帰るにハ勿論なり。
聞く、日本軍は六日普蘭店と台領せし其動作の
神速なる。兵の喫驚一方ならざらざら。

商務部及練兵處大臣等ハ、食塩一斤につき青銭
五十文づつ、の増徴收入を以て、該兩衙門の経費

に充てんことを要請し、各省督撫に知照し、直に
実施をべきことに決せし。

兩宮ハ本日頤和園より還幸せられた。

レツサハ公使ハ珍らしく昨日頤和園参内
列に於けり。オゴロドニコフ大佐亦天津より入
京同様たるが、我々第二軍上陸の戦報外
交團の話極に上りつ、あつ、時々、
中、列座せる露國官吏の心苦しさは餘處の見
る目も氣の毒なり。と此参列者の一人なる外
國武官の逸話なり。

朝陽より来りしルカ、諺に夜兵二百内地に来
り牛馬二百頭を徴發せし内地の支那官吏ハ
之を制止し一面馬玉炭に上申せり

外務部ニ達せし情報によれば夜兵將校二十七
名遼陽高軍の幕中にありて機密の諜報ニ參典
しつゝ、ちりとつふ

遼西一帶ニ於て夜兵の行動偵察の爲り五月一
日山海關を出入せしつゝ、第四回特派の復命
左の如し

溝帮子ニハ夜兵乃其東八清里臺子板に緑色
の肩章を付けたる夜兵五百あり溝帮子より新
民屯ニ至る間の鐵道ハ目下鉄橋架設中ニて列
車ハ仮橋を通過し居り此間各停車場共一人
の夜兵を見せ新民屯にも二名の夜探ありのみ
ニし夜兵の隻數をルルハ新民屯の東曲巖ニも
夜兵の駐屯せしルルハ只同地ニ經てクルン
に入りしルルの十五名あり同地よりハ時々牛馬
を徴發し遼陽ニ送つゝあり
巨流河の南方ハ清里なる王家屯ハ奉天ニ通じ
る大道にして夜兵ハ假橋架設の目的を有し目
下支那船及び板三百板を準備し十舟五十餘隻

と徴登し居小ど人夫缺乏の爲に未だ工事に着手せざり居兵の爲の肩車を付けたるもの五十名と緑色の川の五十名とあり同地對岸興隆店より奉天に至る通路を修理し東岸に教箇の保壘を築まつ、あり特派員、遼河の沿岸を偵察しをよぶ走達房に、舩橋の架設なく河中に一個の渡場あり居兵十名を備へ居り大連浦灣の上流五清里に舩橋あり上位の橋は舩十四隻と横を、其上に厚板を敷き長さ三百尺中二十尺なり下位の川の比長を二百三十尺舩十隻を用ひ居り、此附近の水深は十尺許り、一、二、同地の東岸に土壁を築き西岸に兵六百とあるが肩

車ある居兵四百居りなり通行人を調ぶる事嚴重なる爲に同地の土民等々悉く他に避難し目下一人も留まり居り、同地より南方田庄堡に至る二百五清里の間四ヶ所にせよ乃至三四十の居兵あり、田庄堡に、常駐の居兵あり、特派員が同地滞在の中三十名の昇陸兵が河を渉りて西行せよと目撃せよ、つみ雙臺子にも僅々二十名の騎兵あり、つみ夫より講帯子に至る間にも居兵の隻数なり居兵の遼西に去来せよ、ルは、予く、重糧食徴給の爲に、一、二、其行動は比較的平穩なり云々

五月十二日 (北京發)

袁國ハ其兵力を遼陽方面ニ集中せしむる爲メ
營口及び大石橋方面の兵を引揚げ、其の營
口ニハ小砲二門兵三百を殘し居るハ亦不
日引揚ぐ可シ袁國ハ營口の到底守り難きを察
シ今となして増祺將軍ニ同地を還附せしむ
申込ム増祺將軍ハ其受取の爲メ昨日新下の田
庄台に在るルのを派遣し、袁國今後ヲ防禦
地點ハ鞍山なるべく或ハ遼陽を棄て奉天を
守るハ爲メ馬車二千輛にて糧食を遼陽より奉
天へ運搬せしむる情報亦未だ信難シ

牛莊附近の退守

牛莊税関長の文
送説

牛莊税関長コノハラフハ總稅務司より至急入
京を命ぜりし、不日同税関長の文送を見し
ならん

五月十三日 (天津發)

營口より的情報に、日本軍ハ岫巖を台領
せり

岫巖台領の説

溝帮子附近牛家屯の袁兵ハ大半引揚げ、殘
部ハ不日引揚ぐに、營舎を閉鎖し、器物を

遼河附近の退守

賣松へり

五月十四日 (北京度)

駐京清国公使胡惟德より外務部に電報し来りたる所に據れば清国皇帝は下しキニソフの無責任を怒り今回の戦争清国の全勝ニ帰るにあらざるを以て朕再此汝に見えむと勅電し

遼陽ニ於て一ハソフニ復は日本領六十六鉄に下度せし

清国皇帝の勅電

ハソフの領土下度

内田公使の勸告

昨日午後内田公使は慶親王を訪問して左の如き勸告を與へたり

日本軍全戦全勝向之所敵なきを以て清国の富に各國より之に干渉の措置を執らざるに止むを欲し清国の其中之を放棄して日本と聯合し清国に属せしむるの傾向あり且つ之を以て排外の気概昂りたり云々との欺言を流布し外人に危虞の念を抱かしむるに力あり居少く事理を以てに械敵なき各國の思ふに斯の如き無根の説に迷はざるにせしむるべし但し此際清国の飽くまで中立を堅持し當初の意志

に倅なく同時に国内の安寧を維持し外人を
し其境に安んぜしむることを要すなりと云々

五月十五日 (北平発)

昨年五月安東縣に於て露国の備後せし馬賊と
斬り其首を露国の怒に觸れ旅順奉天等に監禁
さし去月に至り漸く釋放せしむるを參謀の當地
に未着せり同人の語る處に據るが第一回陸戦
大敗以来露軍の士氣は喪甚切しく遼陽に於て
ハ榮を服して故り病人となし兵士も又喇嘛
僧に拾はれ若しくは支那服を着し所在の民衆

に潛伏せしルカ少なりはアレキニ一ノ卑
怯なる行動ハ兵士をして頗る其戦意を喪失せ
しりたり遼陽奉天を死守して露軍は一大戦
を試みんとすに到底困難なりん奉天にハ
増祺將軍軍車毎に皆露の策と奉天に居るも新任
の府尹ハ強硬にして馬糧車輛の徴發に故障を
為し露國も聊可之に憚り居りしと云へり



